

77-369

文學博士那珂通世撰

那珂東洋略史

發兌 大日本圖書株式會社

明治
187-23
内交

自序

この書は、中學校、師範學校、その外これと同じ程度なる學校の教科に用ひしめんが爲に、一昨年二月文部省より示されたる中學校教授要目に據り、稍斟酌を加へて編述せり。要目に載せられざる事項にして、特に一章を設けて述べたるは、中古の第七章「東方諸國の古史」第八章「大月氏佛教の東流」第十四章「北西諸國の盛衰」第廿三章「宋代の西域諸國」の四章なり。東方諸國の事は、我國に係最も深く、大月氏の事、唐代の北西諸國の事、宋代の西域諸國の事は、何れも亞細亞の大勢を知るに闕く可からざるものなり。要目に之を載せられざるは、他の場所にてたとへば、東方諸國の古史は、後の「朝鮮半島諸國の盛衰」の所にて、佛教の東流は、後の「佛教道教云々」の所にて、附説せしむる趣意なるべけれども、事項多く且重要にして、附説にては收まり難し。坂本健一、高桑駒吉兩君の

合著なる新撰東洋史にも、この四章を設けられたれば、余はそれに倣へり。

この四章は、教授要目より増加したれども、孔子と周末の學術とを一章に約め、前漢北宋の各二章なるを一章とし、唐代の三章なるを二章としたれば、合計にては章の數全く要目に同じ。又余は、上古中古の記事を略し、殊に南北朝の時代などは、最も簡短に述べて、近古近世の事蹟を稍委しくせり。故に近古近世七百年間の記事は、年數これに倍する中古千四百餘年よりも、紙數却て多し。又この書は、全體に紙數稍多きの嫌あれども、余は務めて平易の文を用ひ、支那史に特有なるむづかしき用語と譯文に避け難き新奇の熟字とを避けたれば、中學生一年間の業として讀み卒へかぬる氣遣なからん。

この書は、至つて簡略なれども、時代は四千餘年に涉り、範圍は

世界の半を蔽へるが上に、その記事は、古來の謬説と世俗の誤傳とに雷同せざる所往々あれば、之を授くるには、史學に深き者に非ざれば容易ならず。余は、その事に任ずる人の爲に参考の便を圖り、稍委しき東洋史を撰述せんと欲し、今正に著手中なり。又歴史を學ぶに最も必要なる助けは、歴史地圖なり。東洋歴史地圖の出版せられたる者已に數種あり、何れも便益の書なれども、この書を授くるには、この書の内容に適合する歴史地圖あらば、殊に便利なるべきに由り、これも追て著手すべし。

教科書に圖畫を挿むことは、生徒の興味を増し、了解を助けて有益なることなれども、東洋史に用ふべき善き圖畫を得ること甚だ難し。本文に述べもせざる古碑古器物などの圖は、只生徒をして考量を費やさしむるのみにて、本文を解釋する助とはならず、後人の畫ける人物宮殿などには、真相を得たるもの無く、武梁

石室の諸像の如きも、漢代の彫刻の標本とするは善けれども、上古の人物風俗の圖解には用ひ難し。尤も東洋の近世史に關する圖畫は、得易けれども、近世のみにして古代なければ、裳を著けて衣を脱ぎたるが如く、上下釣合はざるが故に、余は圖畫を挿むことを罷めたり。併ながら石澤發身君の東洋歴史地圖の末に、有益なる參考圖畫あまたを集録せられたり。この類の圖畫を用ひて説明を助くるは、最も教師の務むべきことなり。

明治三十七年一月

盛岡 那珂通世識

那珂東洋略史目錄

第一篇 上古

一より二五まで

- 第一章 太古の支那。 一
 - 第二章 唐虞三代。 三
 - 第三章 春秋の世。 六
 - 第四章 周の制度文物。 九
 - 第五章 戰國。 一二
 - 第六章 孔子、周末の學術。 一七
 - 第七章 太古の印度。 二〇
 - 第九章 佛法の興起。 二三
- 第二篇 中古
- 第一章 秦の一統、楚漢の争。 二六

二六より一〇七まで

第二章	前漢	二九
第三章	後漢	三七
第四章	三國	四〇
第五章	晉五胡十六國	四三
第六章	東方諸國 <small>高句麗、三韓、百濟、新羅</small> の古史	四八
第七章	大月氏、佛教の東流	五一
第八章	南北朝隋	五三
第九章	唐の上	五七
第十章	唐の下	六三
第十一章	東方諸國 <small>百濟、高麗、新羅、渤海</small> の盛衰	六七
第十二章	北西諸國 <small>突厥、鐵勒、波斯、大食、吐蕃、印度</small> の盛衰	七〇
第十三章	漢唐の儒學文藝	七七
第十四章	佛教、道教諸西教、南海の貿易	八一

第十五章	五代	八六
第十六章	北宋	八八
第十七章	遼金の廢興	九三
第十八章	金宋の交渉	九七
第十九章	宋代の儒學文藝	一〇二
第二十章	宋代の西域諸國	一〇五

第三篇 近古

第一章	元の太祖の勃興西征	一〇八
第二章	元の太宗、憲宗の南征、拔都旭烈兀の西征	一一二
第三章	元の世祖の一統及東侵	一二六
第四章	元代の治亂、諸汗國の盛衰	一一九
第五章	明の初世	一二四
第六章	帖木兒の兼并	一二八

第七章	明の中世。	一三三
第八章	安南の叛服、沿海の寇盜。	一三七
第九章	明の末世。	一四〇
第十章	元明の儒學文藝。	一四五
第十一章	莫臥兒帝國の興亡。	一五〇
第十二章	葡萄牙、西班牙の東略、天主教の東流。	一五三
第四篇 近世		
一五七より二〇二まで		
第一章	清の開國、世祖の一統。	一五七
第二章	清の聖祖高宗の業。	一六〇
第三章	清の學術。	一六八
第四章	東洋に於ける蘭英諸國の競争。	一七一
第五章	英領印度。	一七三
第六章	清英の交渉。	一七六

第七章	長髮賊の亂、英佛の北清侵伐。	一七八
第八章	露人の東略、清露の關係、英露の衝突。	一八二
第九章	安南暹羅、清佛の交渉。	一八八
第十章	日清韓の關係、日清の戰役。	一九〇
第十一章	東洋に於ける英露佛獨米諸國。	一九五
第十二章	世界に於ける東亞細亞諸國の現勢。	一九九

那珂東洋略史

文學博士 那珂通世 撰

第一篇 上古

第一章 太古の支那

支那の地勢

亞細亞の中央に、パミールの高原あり。この高原の南端より西にヒンドクシ山脈あり、東に崑崙山脈あり、崑崙の南に當り、東南に連れるは、ヒマラヤ山脈にして、印度と支那帝國との界をなせり。崑崙の東に連れるバヤンカラ山脈の北麓より出づる諸川は、黄河となり、東に流れて、渤海に入る。その南麓より出づる諸川は、金沙江となり、大江となりて、東海に入る。黄河大江の二大川の通過する大平原は、支那の

上古 太古の支那

太古の支那人種

有史以前の帝王

本土なり。

今より五千年ほど前に、支那人種は、黄河の左右に蔓り、東、東南蠻を逐ひ斥けて、その勢力は、淮水大江の地方まで及び、遊牧の俗より耕作の業に移り、沃野を擇んで土著し、幾千の小部落に分かれて、萬國と稱し、各君長あり、その君長の中より戴かれて天子となる人あり、時々其國を一統したれども、皆子孫は長く續かざりき。

それらの天子の中に、伏羲(又は大皞)、神農(又は炎帝)、黃帝、少皞、顓頊、帝嚳など云へる聖王あつて、種々の製作を成せりと云ふ傳説あれども、その年代世系國都も明かならず、その事業も慥なることは知るべからず。その頃は、已に文字の使用は始まれる如くなれども、記録の未だ起らざりし時なれば、聖王の製作など云ふことも、大抵後世の想像

唐堯

虞舜

陶唐氏有虞氏

より出でたる説なり。唐堯虞舜二帝より後の事は、尙書と云ふ古書に記されて、その事蹟稍明かなり。

第二章 唐虞三代

唐帝堯は、陶唐今の山西太原府の君より起つて、天子となり、曆法を定めて民に時を授け、年老いて、虞舜を擧げて、政を攝せしめ、遂に帝位を譲れり。虞帝舜は、孝子の名甚高く、堯の位を嗣ぎ、禹、稷即ち后稷、名は棄、契、皐陶など云ふ賢臣を用ひて、國大に治まれり。禹は、司空水土を掌る官となりて、洪水を治め、全國を九州に分け、貢賦の制を定めたり。

堯舜の頃は、國號もなく、唯堯は、陶唐に居りし故に、陶唐氏と號し、舜は、虞今の山西蒲州府の人なるが故に、有虞氏と號し、并せては唐虞と云ひ、四方の蠻夷戎狄に對して、凡て支那人種の住める地方をば、華夏とも中國とも云へり。禹は、舜

夏后氏

の後を受けて天子となり、夏后氏と號す。夏后は、華夏の君と云ふ義なり。堯舜禹の世は、今より四千餘年前なり。

夏の世

禹の子啓、賢にして、能く禹の業を繼ぎ、王家の世襲、こゝに生まれり。夏后氏王たること、十七世、四百餘年にして、桀に至り、暴虐にして、諸侯服せず、遂に商湯に滅ぼさる。

商王成湯

湯は、舜の司徒教育を掌る官の後にして、世々商今の陝西の州の君たり。湯に至り、亳今の河南歸德府に居れども、國名は猶商と云ふ。

商の世

賢相伊尹を用ひて、政を修め、無道の國を征服し、夏后桀を放ち、諸侯に推されて王となり、成湯と號す。湯の子孫相繼いで王たること、三十世、六百餘年、紂に至り、暴虐にして、周の武王に滅ぼさる。後世無道の君を擧ぐれば、先づ桀紂を並べ稱す。

周の大王文王

周は、舜の後稷農務を掌る官の後にして、棄の子孫は、夏の末

周の武王

に當り、戎狄の間に匿れしが、亶父に至り、狄の禍を避けて、岐山の下に移り、周原今の陝西鳳翔府岐山縣に國を立てたり。亶父の孫、西伯昌は、賢士を尊び、仁政を施し、商の諸侯の三分の二ほどは、皆周に服従せり。この君は、後に追尊して周の文王と云ふ。文王の子武王發は、呂望即ち太公望を用ひて、太師とし、諸侯を率ゐて、商王紂を牧野今の河南衛輝府の東北に伐ち、敗り、商に代つて天子となり、鎬京今の陝西西安府長安縣に都せり。これ

周公旦

我が紀元前三百九十一年西曆紀元前一千五百一十一年の事なり。武王の弟周公旦、賢明にして、才藝多く、武王を輔けて國

成康の治

を治め、又召公奭と共に成王武王の子の輔け、禮を製し、樂を作り、制度を定めたり。成王成王の子康王成王の子の際、國內安寧にして、周の最も隆盛なる世なりき。

穆王

康王の孫穆王、故なくして、犬戎西戎の一種を征してより、戎

厲王

宣王の中興

幽王

周の兩都

五霸

狄服せず、四世を歴て厲王に至り、暴虐にして、國人に逐はれ、其子宣王、蠻夷を征伐して、中興の業を建てたれども、晩年に至り、政衰へ、其子幽王は、無道にして、犬戎に攻め殺されたり。これ我が紀元前百十一年西洋紀元前七の事にして、武王の商に代りしより二百八十一年に當れり。

周の王畿は、今の陝西河南二省に跨り、洛邑今の河南河南府治洛陽縣に東都を設け、鎬京を西都として、王は常に西都に居りしが、こゝに至り、戎に逼られて、西都を保つこと能はず、幽王の子平王、東都に於て王位を継ぎたれども、王權已に衰へ、命令行はれず、五霸齊の桓公、晉の文公、秦の穆公、楚の莊王、越王句踐の代るゝ興つて、諸侯の會盟を主れり。其事は、春秋の書に記載せるが故に、之を春秋の世と云ふ。

第三章 春秋の世

諸侯の數

支那の諸侯は、古は萬國と云ひしが、千餘年の間互に兼并して、商の初には三千となり、周の初には千餘國となり、春秋の初に至り、百餘國となり、并吞益盛にして、強大の國並び興り、迭に文武を勵み競へり。諸侯の著しきもの、周と同姓(姬姓)なるは、魯侯、衛侯、晉侯、鄭伯、燕伯、吳子などあり、異姓なるは、宋公(子姓)、齊侯(姜姓)、秦伯(嬴姓)、楚子(芊姓)、越子(姒姓)などありき。

夷狄の患

周室已に衰へ、雜戎往往畿内に入り込み、河北には山戎、赤狄など云ふ夷狄あり、屢諸侯を攻め惱まし、楚今の湖南、荆蠻より起りて、淮漢の間なる諸國を并せ、漸く中國に逼れり。齊今の山東の桓公、管仲を用ひて、國政を修め、王室を尊び、夷狄を攘ひ、南は楚を征して、その北進の勢を挫き、諸侯の長となれり。これ五霸の第一にして、その時代は、周の惠王

齊の桓公の

宋の襄公の敗

晉の文公の覇

秦の穆公の覇

楚の莊王の覇

襄王の世、我が紀元前後の頃なり。
 齊の桓公の後、宋今の河南 歸德府の襄公も霸たらんとしたれども、楚の成王に敗られ、成らずして死せり。その頃、晉今の山西の文公は、國難を避けて、諸國に流寓せしが、秦今の陝西の穆公の助により、歸つて晉侯となり、先づ王室の難を靖んじ、襄王二十年、我が紀元前六百年諸侯を率ゐて、楚の成王を城濮衛の地、今の山東曹州府濮州に敗り、王命を受けて、諸侯の長となれり。これ五霸の第二なり。これより百餘年の間、文公の子孫、世々中國に霸たりき。

秦の穆公は、西周の故地に居り、二十國を并せて、遂に西戎に霸たり。これ五霸の第三なり。

楚の成王の孫、莊王、羣蠻を定め、陳今の河南 陳州府を討じ、鄭今の河南 開封府新鄭縣を降し、晉の景公の師を撃ち敗り、中國の諸侯も

越王句踐の覇

周の官制

多く之に屬せり。これ五霸の第四なり。

晉の景公の時、霸業稍衰へしが、悼公に至つて又盛なり。その後、吳今の江蘇の王闔廬、楚を敗つて、國勢盛なりしが、越今の浙江の王句踐に敗られて、傷いて死せり。闔廬の子、夫差、越を敗つて、句踐の降服を許したれば、句踐は、二十年の間、身を困め、政を勤め、周の元王元年、皇紀一八六年、西紀前四七五年遂に吳を滅ぼし、勢に乗じて上國を征し、宋鄭魯今の山東 兗州府衛今の河南 衛輝府皆入朝せり。これ五霸の第五なり。

第四章。周の制度文物。
 周の官制は、太師太傅太保を三公と云ひ、少師少傅少保を三少と云ひ、皆天子を輔佐する役なり。冢宰宗伯司徒司馬司寇司空を六卿と云ひ、三少と合せて九卿とも云ふ。冢宰は百官を總べ、宗伯は祭祀禮樂を掌り、司徒は教化を掌

越王句踐の覇
 越王句踐は、周の元王元年、吳を滅ぼし、勢に乗じて上國を征し、宋鄭魯衛皆入朝せり。これ五霸の第五なり。

封建の制

り、司馬は、兵馬を掌り、司寇は、刑罰を掌り、司空は、土木を掌る。六卿の下には、あまたの大夫士あり、各その長官に屬せり。春秋の世に至り、諸大國は、皆天子の制に倣ひ、その大夫の中より六卿の如き大官を備へ置けり。

王畿は、方千里我が百餘里と稱し、その外は諸侯の國なり。諸侯の爵は、公侯伯子男の五等に分れ、公侯の國は、方百里我が十里にして、大國と云ひ、伯は、その半にして、次國と云ひ、子男は、又伯の半にして、小國と云ふ。小國よりも小きものは、附庸と號して、大國に屬せり。春秋に至り、諸侯互に吞滅し、齊晉秦楚の如きは、皆二三十國を并せて、方數百里又は千里の國となりたるに、周は益削られて、却て一小國となれり。

禮樂

禮樂は、古より甚重んぜられて、治國の要具となれり。樂

喪服

器は、鐘、鼓、琴、瑟、笙、磬の類を用ひ、舜の韶樂、武王の大武樂は、美を盡せる者なりと云ふ。禮は、冠、婚、喪、祭、燕、射、朝、聘等の禮あり。喪期の最も長きは、二十五日に涉り、三年の喪と云ひ、次に十三月なるを朞の喪と云ひ、次には九月五月三月の喪あり。棺槨には甚だ厚き木を用ひたり。

祭祀

祭禮の最も重大なるは、郊祀とて、上帝を南郊に祀り、太祖后稷を配食せしむる禮にして、天子の外は行ふことを得ず。次は宗廟社稷の祭にて、天子も諸侯も之を行ふ。社は土の神、稷は穀の神なり。廟は、天子諸侯のみならず、諸侯の大夫士までも、皆設けたり。春秋の世、諸侯の強大なるに隨ひ、宗廟宮闕の構造、皆壯麗になれり。

春秋の禮樂

周の禮樂は、周公の時を盛なりとすれども、唯王朝のみに行はれて、全國に廣まれるには非ず。春秋に至り、列國競

學校

争の結果として、禮樂大に行はれ、文物益進み、朝聘の禮の如きは、士大夫の最も研究を要する事となれり。

學校は、國學と郷校とあり。夏に校と云ひ、商に序と云ひ、周に庠と云へるは、皆郷校にして、周の國學は、辟雍と云へり。その教科は、禮樂射御書數の六藝なりき。春秋に至つては、列國にも、學校興り、六藝の外に詩書を學べり。詩は、周代の作にして、國風、雅、頌に分れ、書は即ち尙書にして、虞夏商周の記録なり。

詩書

第五章 戰國

越王句踐の後、霸者久しく興らず、齊晉の二國は、皆世卿の家強大にして、公室微弱となり、周の威烈王二十三年、紀皇前四〇三年、西紀晉の三卿魏趙韓氏、諸侯となり、國を魏趙安王十六年、皇紀二七五年、西紀齊の田氏、諸侯となり、初は田侯、後には齊侯

三晉田齊

諸侯の僭王

侯と、齊晉の地は、皆新國に并せられたり。これより秦楚燕の三舊國と齊趙韓魏の四新國との七大國、互に攻伐を事とし、之を戰國の世と云ふ。七國の中、楚は、春秋の初より王と稱し、他の六國は、戰國の半に至り、皆王と稱せり。此時、春秋の初に有りし百餘の諸侯は、殆ど皆滅ぼされて、中山の今直隸正定府宋、魯、衛等の數小國、僅に大國の間に残り、周は、東周西周の二小國に分れ、周王は、二周の間に寄食するのみなりき。

東西周

七國の位置

七國の中、三晉即ち趙韓魏の國は、中原の地を占め、趙は山西の中部、魏は今の山西の南部、韓は今の山西の東南部、河南の中部、魏は今の山西の南部、河南の北部を有ち、燕は北に在り、今湖北齊は東に在り、今湖北楚は南に在り、今湖北秦は楚魏と界を接して、西方に在り、今陝西諸侯に夷狄として遇せられ、中國の會

秦の孝公の變法

盟に與ることを得ざりき。秦の孝公之を憤り、周の顯王十年、紀前三五〇九年、西商鞅の策を用ひて、國法を變じ、民をして什伍の組合を設けて、互に糾察せしめ、耕織の業を勤め、爵位を以て軍功を勵まし、十年にして、國力頓に強く、魏の軍を撃ち破つて、その河西黄河の西北部の地を取れり。

合従連衡の説

秦國已に強くして、東方に力を伸べたれば、六國は其力を合するに非らざれば、秦を制すること能はず。秦は、又六國の合はざるを利とす。是に由つて合従連衡の説起れり。従は縦なり、南北を云ふ。衡は横なり、東西を云ふ。六國の位置は、南北に列するが故に、六國その力を合するを従を合はすと云ひ、六國と秦とは、東西に列するが故に、六國合はずして、各、秦に和するを衡を連ぬと云ふ。

蘇秦の合従

周の顯王三十六年、紀前三三三年、西周人蘇秦、燕の文公

張儀の連衡

に見えて、合従の計を説き、その同意を得て、趙の肅侯に説き、韓魏齊楚の王に説き、六國の盟約成れり。時に魏人張儀、秦の惠文王に事へて、専ら連衡の計を運らし、魏の襄王に説いて、秦に和せしめ、遂に周の赧王四年、紀前三五〇年、西紀前四一一年、楚韓齊趙燕の王に説き、皆西面して秦に事へしめたり。

説客

蘇秦張儀、皆遊説を以て富貴を取りしかば、遊士説客、その風を慕ひ、争うて之に倣ひ、紛紛として四方に遍し。これより諸侯の公子大臣、士を招くの風、又盛に行はれ、齊の孟嘗君、趙の平原君、魏の信陵君、楚の春申君の如き、皆食客數千人を置いて、互に人材多きことを誇れり。

食客

齊燕の争

連衡は、秦に利にして、合従は、六國に益あることは、甚だ明かなれども、六國互に嫉みて、久しく約を守ること能はず。殊に齊燕は、最も不和なる國にして、齊の宣王は、嘗て燕

の亂に乗じて撃ち破り、宣王の子湣王の時、燕の昭王は、樂毅を用ひて、齊を撃ち破れり。諸侯には、かゝる争ひの絶えざる間に、秦は、その侵略の計を遏めざりき。

秦の昭王

二周亡ぶ

秦の昭王、惠子白起を將軍とし、韓魏を敗り、楚を敗り、又魏人范雎を丞相とし、その遠交近攻の策を用ひ、齊楚と和して、連に三晉を攻めたり。周は、東遷より四百十年にして二つに分れ、後百五年にして、その西周は、秦の昭王に滅ぼされ、又後七年にして、東周は、秦の莊襄王昭王の孫に滅ぼされたり。秦王政莊襄王の子、始皇帝に至り、李斯の計を用ひ、謀士を遣して、諸侯の君臣を離開し、然る後に、良將をして進ましめ、その十七年皇紀前二四三〇年、西に韓を滅ぼしてより、二十六年皇紀前二四一〇年、西まで十年の間に、趙、魏、楚、燕、齊を次第に滅ぼして、諸侯皆亡びたり。

六國亡ぶ

春秋の文學

第六章 孔子、周末の學術

孔子の略傳

春秋の世、文學盛に興りたれども、學問を專にする者は、多くは列國の史官にして、故事に傳へ、又は災祥を説くに過ぎざりしが、孔子出でて、唐虞三代の道を述べ、儒教を興して、後世に遺せり。孔子、名は丘、字は仲尼、周の靈王二十年、皇紀一〇九年、西紀前五五二年、魯に生れ、十五歳の時、學に志し、三十にして學成り、詩書禮樂を以て弟子を導き、身を修め、國を治むるに皆仁恕を本とすべきことを教へたり。五十餘歳の時、魯の司寇となりたれども、道行はれざるが故に辭し去り、十八年の間、衛、宋、陳、蔡を周遊して、魯に歸り、禮を修め、樂を正し、春秋を筆削し、七十四歳にして歿せり。

論語

孔子の教は、論語に詳かなり。論語は、孔子又は弟子の語を弟子の門人等の記し置けるを、後儒の輯めたるものな

儒家の分派

孔子歿して後、七十子の徒、諸侯に散じ、各その長じたる德行言語政事文學を以て教導し、その文學の内にも、詩書禮樂易春秋の一二科を專修するもの出でて、遂には儒家の説も、數派に分れたり。

孟子

戰國の中頃に至り、魯の南隣なる鄒の國今の山東兗州府鄒縣より、孟子名は軻といへる大儒顯れ、孔子の道を述べ、魏の惠王、齊の宣王に見えて、王道を行ふことを教へ、其説は、當時の諸侯に用ひられざれども、その問答教訓を録せる孟子の書は、後世に至り、論語と并べて、論孟と稱せらる。孟子に後れて、趙の人荀況あり、書を著して、禮樂を論じ、又性惡の説を唱へて、孟子の性善の説に反對せり。

荀子

楊子

戰國の初に、楊朱墨翟の説起れり。楊朱は、自愛を主とし

黄老の道

て、仁義を偽とし、予へず取らず、天性に従つて、外物を侵さざることを貴べり。其説盛に行はれて、之を奉ずる者に列禦寇莊周など云ふ學者出で、又其説を古人に託して、黄帝老子の書を作れる者あり、之を黄老の道と名づけたり。此派の學者を道家と云ふ。道家より一變して、後には道教と云ふ宗教生じたり。墨翟は、兼愛を主とし、儒者の禮樂を重んずるを非とし、儉約を務めて、互に世を益することを貴べり。その徒又甚だ衆く、之を墨家と云ふ。道家墨家は、孟子も荀子も、力を極めて排斥せり。

墨子

諸子の學

此時代は、異説競ひ起つて、互に智辯を鬪はし、道家墨家の外に、管仲李悝を祖とする法家の學あり、申不害、商鞅、韓非、最も顯れ、又孫武、吳起を祖とする兵家あり、蘇秦、張儀を祖とする從橫家あり。辭賦の名人には、楚の屈原ありき。

阿利耶種の
分派

第七章。 太古の印度。
パミール高原の東、黄河の左右に、支那人種の蔓延せる頃に、高原の西、縛芻河今のアのの邊に、阿利耶人種起れり。この人種は、數派に分れて、東南に遷れるは、印度阿利耶種となり、其地に残り、かつ西南に廣まれるは、伊蘭種即ち波斯人となり、遠く西に遷れるは、希臘種、羅馬種、ケルト種、チウトン種、スラブ種など云ふ歐羅巴人種となれり。

印度阿利耶種

印度阿利耶種は、初に信度河今のインの邊に遷り住みたるが故に、其國を身毒と云ひたるが、後には印度と云ふ。此人種、次第にふえて、今より三千年前の頃には、笈伽河今のガンヂの左右に蔓延し、ドラギダ種と云ふ土人を征服して、あまたの國を立てたり。

印度の四種姓

かくて印度の人民は、阿利耶種と土人との混合せる者

婆羅門教

にして、その世業の區別に隨ひ、四等の種姓を生じたり。
第一は、婆羅門、僧族にして、祭祀宗教の事を掌る。
第二は、刹帝利、王侯兵士の族にして、政事軍事を掌る。
第三は、吠舍、平民の族にして、農牧商工の業を營む。
第四は、戍陀羅、力役者にして、耕作運搬等の賤業を勤む。
四姓の中、初の三姓は、阿利耶種にして、戍陀羅は土人なり。
阿利耶種は、早くより、吠陀と云ふ經典を傳へしが、婆羅門はこの經典を研究して、婆羅門教を始め、宇宙の主を、梵天と名づけ、靈魂は、梵天より出て、輪廻する者とし、懺悔苦行によつて、罪障を滅し、轉生の繫縛を脱して、梵天に復歸せんことを目的とせり。又聲明、學語、巧明、星學、數學、醫方明、醫學、論理、內明、哲學の諸學に通じ、學術の盛なることは、支那の周末にも勝れり。されども婆羅門は、その智力を負み、

婆羅門の學術

婆羅門の歴史

他の種姓を抑へ、宗教學術の利益を世に弘むる事を務めず、刹帝利すら、其壓制に苦める程にして、成陀羅の如きは、婆羅門の説法を聽くことをも許されざりき。

第八章 佛法の興起。

釋迦牟尼佛

佛教の祖師なる釋迦牟尼佛は、中印度の迦比羅城の王子にして、悉達太子と稱し、二十九歳の時、家を棄て、摩揭陀國の山林に入り、婆羅門に就いて學び、苦行六年の後、婆羅門の説の非なるを悟り、佛陀伽耶なる菩提樹の下にて、解脱の道を發明したりと云ふ。それより佛陀覺の稱起り、その教を佛教と云ふ。釋迦は、成道の後、諸國を巡つて説法し、年八十歳にて、拘尸那揭羅の娑羅雙樹の間に歿せり。之を佛陀の涅槃といふ。この涅槃の年は、皇紀一七六六年、西紀八五五年、周の敬王三十五年にして、孔子の歿したる敬王四十

釋迦の時代

第一第二の結集

アレクサンドルの東征

一年より僅に六年の前に在れば、釋迦と孔子とは、殆ど同時の人なり。

佛陀の涅槃の年に、その高弟なる大迦葉、五百の阿羅漢を集めて、王舍城摩揭陀國の都の西なる石室に會して、佛説を議定したり。之を第一の結集と云ふ。其後百年、皇紀二七六年、西紀前三八五年、西耶舍陀の催しにて、七百の高僧、吠舍釐に會し、第二の結集をなせり。

釋迦の世に在りし頃、伊蘭人種は、亞細亞の西部に大國を建て、波斯のアキメネス朝と云ひ、希臘の列國と屢海陸に戦ひたりしが、皇紀三二七年、西紀前三四年、希臘のマケドニヤ王アレクサンドル、波斯を征し、數年にして之を定め、三三四年、西紀前三、印度に入り、信度河の地方を平ば、中印度をも侵さんとしたれども、暑氣に堪へざるが爲に、守兵を留

第二篇 中古

第一章 秦の一統、楚漢の争

皇帝の號
郡縣の制
秦の三公
秦の暴政

秦王政、六國を滅ぼして、支那全國始めて一君の統轄に歸したれば、羣臣に命じて尊號を議せしめ、王を改めて皇帝とし、諡の法を廢して、始皇帝と稱し、秦の舊法に因り、郡縣の制を定め、全國を三十六郡に分け、各郡に守尉監を置けり。守は民を治め、尉は兵を掌り、監は御史にて郡の政を監視する者なり。朝廷には丞相、太尉、御史大夫の三大官あり。丞相は首相にして、太尉は全國の兵權を統べ、御史大夫は百官を監察し、その形、郡の守尉監に似たり。

秦は、孝公より以來、世々刑法を以て下を御し、其政嚴刻なりしが、始皇に至り、益、驕暴を逞うし、内は土木を事とし、

土木

外は四夷を威し、賦斂愈重く、徭役已むこと無し。土木の最も大なるは、渭南の朝宮にて、その前殿なる阿房宮のみにて、東西五百步、南北五十丈あり。その外、關中關外に七百餘の宮殿を建てたりと云ふ。

長城

戰國の時、秦、趙、燕の三國は、皆北狄を防がんが爲に、長城を築けり。その北狄の中に、トルコ種の祖なる匈奴起つて、支那に逼れるにより、始皇は、蒙恬を遣して、撃ち拂はしめ、長城を増築して、臨洮今の甘肅省岷州より遼東今の奉天省奉天府まで續け、之を萬里の長城と云ふ。又南嶺を踰えて、南越の地今の廣東、廣西、佛蘭西を取り、秦の領地、北は陰山より、南は南海に達せり。

詩書を焚き、術士を坑にす

始皇は、學者の古を引て今を譏るを惡み、詩書百家の語を收めて焚き、挾書の禁を設け、詩書を語る者を死刑に處

羣雄興る

し、又咸陽秦の都、今の陝西西安府咸陽縣の書生四百六十餘人を拘へて坑殺せり。

かくて始皇の三十七年皇紀四一〇一年、西紀前二一〇年に、始皇崩じ、少

子胡亥立ち、二世皇帝と稱したれば、その明年には、陳勝吳

廣、亂を作して、陳に據り、諸郡縣争うて、長吏を殺して之に

應ぜり。楚の舊臣項梁、項籍は吳今の江蘇蘇州府より起り、江を渡

つて北に進み、沛今の江蘇徐州府沛縣の人劉邦も兵を起して項梁

に屬せり。

陳勝吳廣は、その下に殺され、項梁は、戦死したれども、燕

齊三晉の地、皆已に秦に叛き、項籍は、秦軍を鉅鹿今の直隸順德府平郷縣

に破り、河に沿うて西に進み、劉邦は、河南に戦ひ、項籍に先

だつて武關今の陝西商州の東西に入る。時に二世皇帝、姦臣に弑せら

れ、兄の子子嬰、秦王となり、劉邦の霸王陝西西安府城の東に至るに

劉邦關に入る

項籍霸王となる

及んで、出でて降り、秦亡びぬ。項籍、諸侯の兵を率ゐて、函谷

關今の河南陝州靈寶縣に入り、劉邦を巴蜀今の四川漢中今の陝西漢中府に

封じ、漢王とし、諸將十餘人を皆王に封じ、籍自ら西楚の霸王

と稱して、彭城今の江蘇徐州府に都せり。

劉邦は、蕭何を丞相として、國を治めしめ、韓信を大將と

して、趙燕の諸國を平げしめ、張良陳平の謀士を従へて、自

ら項籍と戦ひ、屢敗北したるが、漢の五年皇紀四一五年、西紀前二一四年

垓下今の安徽鳳陽縣の南の戦に、項籍大敗し、遂に自殺して亡び、

諸侯王、漢王を尊んで皇帝とし、都を長安周の鎬京に定む。之を

漢の太祖高皇帝と云ひ、略しては高祖と云ふ。

第二章。前漢。

高祖の封建

漢の高祖は、子弟同姓を封じて王とし、功臣の王たる者、韓信、彭越、黥布の如きは、事に因つて誅除し、劉氏に非ざれ

ば王となるを得ずと云ふ約束を定められたれば、高祖の末年には、劉氏の王たる者九國あり、九國の領地を合すれば、全國の半に過ぎたり。

呂太后

高祖の子惠帝崩じて後、呂太后の親族、權を擅にせしが、大臣陳平、周勃等、宗室の助を借りて、諸呂を誅し、惠帝の弟代王恆を迎へ立てたり。之を太宗孝文皇帝と云ひ、略しては文帝と云ふ。文帝は、仁恕にして節儉を好み、蓄積の増したるに由り、田租を全く除くに至れり。又古より肉刑とて、黥、劓、剕、刑など云ふ刑ありしを、除き、専ら寛厚の政を施したれば、國善く治まり、仁君と稱せらる。

吳楚七國の亂

文帝の子景帝は、晁錯の策を用ひ、諸侯の罪過ある毎に、其領地を削りたれば、諸侯皆怨み、吳王濞高祖の子、兵を起して漢に叛き、楚、趙等の六國之に應じて、勢盛なりしが、太尉

諸侯王の削弱

周亞夫周勃の子、之を撃ち平げたり。これ景帝三年皇紀五〇七年、西紀前の事にして、吳楚七國の亂と云ふ。景帝已に吳楚を平げてより、諸侯王を抑制して、民を治めしめず、朝廷より官を遣して、其國を支配したれば、藩國と云ふは名のみとなりて、漢の郡縣と異ならざりき。

儒學

文帝の世、文學稍興りたれども、儒者は未だ用ひられざりしが、武帝景帝の子は、儒學を好み、五經博士を置いて、詩書易禮春秋の講義を掌らしめ、博士の弟子を募り、又文才ある者を寵用して、文學を獎勵せり。此時儒者には、董仲舒、孔安國などあり、文人には、司馬遷、司馬相如などあり、經學文學共に盛になれり。されども武帝の大業は、文事よりも武事にあり、自ら才略を恃み、四夷の征伐に力を用ひたり。

文藝

武帝の武功

匈奴

一、匈奴。秦の末より匈奴益強く、冒頓トジク、單于シヤンと云ふ者、東

中亞細亞

胡を滅ぼし、月氏を走らして領地甚だ廣く、高祖も嘗て白登今の山西大に圍まれて困みしことあり、それより和親を結び、年毎に幣物を遣れども、時々漢の地を侵して已ま
ず。武帝、數世の恥を洒がんと欲し、衛青霍去病等をして屢
出でて征伐せしめ、河南の地今の内蒙古を取り、單于匈奴の
主のを大沙漠の北に逐ひ出し、又河西の地今の甘肅を取
り、匈奴の羌即ち圖伯と通ずる道を絶てり。
二、西域。シリヤの王國は、創立の後久しからずして衰へ、
皇紀第五世紀の初西紀前第三、その東北の二州叛いて獨
立し、東なるをバクトリヤと云ひ、漢史に大夏と云ふ。今のア
岸西なるをバルチャと云ひ、漢史に安息と云ふ。今の機羅國
のホラッサー大月氏は、圖伯特種にして、本河西に居りしが、匈
奴に逐はれて、西に遷り、縛芻河今のの北に據り、大夏を征服し、

張騫

烏孫 大宛

西南夷

安息と界を接したり。武帝、月氏の匈奴を恨みモると聞き、之
と同盟して匈奴を夾み撃たんと欲し、張騫をして月氏に
使せしむ。張騫、匈奴の地にて十餘年留められ、間を得て西
に走り、大宛今の露西亞康居今の露西亞領キルギス荒を經て、月氏
の國に達したれども、月氏は、匈奴に報ゆる心なかりしか
ば、張騫は同盟の目的を達せずして歸れり。されども西域
諸國の形勢は、これより漢人に知られ、單于北に遁れ、西域
の道通ずるに及んで、張騫等、復諸國に使し、南は身毒今に至
り、西は安息に至り、かつ烏孫國伊犂と好を結び、匈奴と交
を絶たしめたり。武帝、又大宛の善馬を得んと欲し、李廣利
を遣して撃ち破らしめたることあり。これ漢軍の葱嶺即
のバミールを躡えたる始めなり。
三、西南夷。今の貴州雲南及び四川の西南部は、苗越種

滇國

の羣居する所にて、これまで支那の域外なりしが、武帝先づ西南夷即ち今の四川の西南部を降して、皆郡縣とし、又張騫が月氏に使せし時、身毒は大夏の東南に當ると聞けるに由り、蜀を去ること遠からざらんと度り、蜀より身毒に至る道を求めたれども、達すること能はずして、滇國今の雲南に達し、後其國を撃ち取れり。

南越

四、南越。南嶺以南は、皆苗越種の地にして、秦の時郡縣となり、後閩越今の福建南越今の廣東、西東京、安南の國起りしが、武帝、皆兵を遣して撃ち平げたり。

朝鮮

五、朝鮮。商王紂の亡びし時、王族箕子、逃げて朝鮮に入り、その君となれり。箕子相繼ぐこと四十一世にして、箕準に至り、漢の初に燕人衛滿に國を奪はれ、南に走り、韓の地に入り、金馬渚今の全羅道益山郡に據つて、韓王となれり。衛滿は、自

武帝の迷信

立して朝鮮王となり、その孫右渠に至り、武帝に撃ち滅ぼされたり。朝鮮の地は、今の奉天省の東部より韓國の北四道平安、咸鏡、江原、咸鏡に及び、箕子衛氏、皆王險道今の平安道平壤府に都したりき。

武帝の失政

かくて武帝は、武威を輝かさんが爲に、頻に軍を興したる上に、方士の説に惑ひ、長生を得んことを願ひ、屢巡遊して、神仙に逢はんことを求め、又土木を好み、宮殿樓閣を盛んに作りたれば、前代の畜積をも費消して、國用續かず。これより或は官爵を賣り、或は錢を納めて死罪を贖ふことを許し、鑄錢製鹽造酒の業を官の專賣とし、賦税を重くして、財政の困難を救はんとしたれば、國民疲弊して、處々に盜賊起れり。されども晩年に至り、追悔の詔を下して、暴政を罷めたるに由り、國に大變なきことを得たり。

宣帝の中興

西域都護

武帝の後に宣帝武帝の曾孫のとき云ふ中興の君あり、政事に力を盡し、賢相良吏を選び用ひ、國內善く治まり、又烏孫を援けて匈奴を撃ち破り、匈奴に屬せる西域の諸國皆叛いて漢に降りしかば、鄭吉を西域の都護とし、幕府を烏壘城今庫車の東に立て、鄯善今の羅布より康居に至る三十六國を督察せしめ、漢の號令を施せり。

匈奴の服屬

その後、匈奴に内亂起り、呼韓邪單于と郅支單于と國を争ひ、呼韓邪は漢に降つて、屬國となれり。元帝宣帝の子の時に至り、郅支は漢の使者を殺して、康居に走りたるに、西域都護甘延壽、副校尉陳湯、康居を征して、郅支を撃ち殺せり。

王氏の篡弒

成帝元帝の子の時、母王太后の姪王莽は、恭儉を装ひて、聲譽を博し、平帝元帝の庶孫を立て、己れ太傅となり、遂に平帝を弒して、漢を篡ひ、國號を新と改めたり。皇紀六六九年、西紀九年王莽既

王莽の敗滅

に帝と稱し、頻に制度を改め、法令煩はしく、賦斂重かりしかば、農商皆業を失ひ、盜賊競ひ起り、在位僅に十五年にして、漢兵に滅ぼされたり。

第三章 後漢

昆陽の戰

王莽の末年、四方に起れる豪傑の中に、漢の宗室劉秀景帝の六世孫あり、昆陽今の河南南陽府葉縣の南の戰に、數千の兵を以て王

光武の興復

莽が四十二萬の大軍を破り、威名頓に盛なり。漢の諸將は、長安に入り、王莽を殺したれども、羣雄割據して、國分裂したるが、劉秀は、先づ河北を定め、帝位に陞つて、漢室を再興せり。時に皇紀六八五年西紀二年なり。之を漢の世祖光武皇帝と云ふ。長安の東に當れる洛陽周の東都を都としたるが故

羣雄平ぐ

に、これより後を東漢の世と云ふ。光武は、諸將を遣して、次第に羣雄を平げ、兵を起して、より十四年にして、一國平定

東漢の儒學

光武は、武功を以て大業を成したれども、國既に定りては、武臣を退けて、文吏を進め、専ら民治に心を用ひ、太學を起し、禮樂を修め、子明帝、孫章帝、皆善く其業を繼ぎ、儒を尊び、學を重んじ、經學盛になれり。

外戚宦官

和帝章帝の子の時、太后の兄竇憲、權を專にして、宦官鄭衆に殺され、それより六世冲帝、質帝、桓帝の間は、外戚代るゝに政を執り、屢宦官と權を争ひしが、逆臣梁冀誅せらるゝに及んで、政權全く宦官に歸せり。是時李膺、陳蕃等、太學の書

黨錮の禍

生三萬餘人と共に、國政を評論し、朝臣を非難したれば、宦官と學者との軋轢烈しくなり、靈帝即位の初、陳蕃等、宦官を誅せんとして成らず、名士百餘人殺され、黨人と名づけて廢錮せられたる者、六七百人に及べり。

南北匈奴

王莽の亂に匈奴西域皆叛きしが、光武の時、匈奴分れて南北となり、南匈奴は、漢に降つて、長城の内に遷り、北匈奴は、稍強くして鄯善、車師今の土魯番地方皆之に屬せり。明帝の時、班超、西域に使し、鄯善に至り、北匈奴の使者を斬つて、其國を威服し、勢に乗じて、于闐今の喀什疏勒今の喀什を降し、西域復漢に通ぜり。

班超の武功

鮮卑

章帝の時、北匈奴亂れて、鮮卑に撃ち破られ、和帝の時、又竇憲に撃ち敗られて、益衰へたり。鮮卑は、漢の初に匈奴に滅ぼされたる東胡の遺種にして、その後人口繁殖して、漸く盛になり、今匈奴の敗れたるに由り、徙つてその故地を領し、遂に塞北の大國となれり。

西域都護

班超は、西域都護に任ぜられ、龜茲今の庫車に居り、叛を討じ、服を撫し、西域五十餘國皆内屬し、葱嶺の東西に漢の威を

甘英

振へり。班超、西域に居ること三十年にして歸り、任尙代つて都護と爲りたれば、西域復漢に叛けり。

班超嘗て甘英を大秦國に遣したるに、甘英は、西亞細亞の諸國を巡り、シリヤに達して歸れり。大秦は、即ち羅馬帝國なり。この時シリヤは既に大秦に屬し、大秦の領地は、安息と界を接せり。支那は、絹の産地として、歐邏巴に知られ、その絹は、珍重せられたれども、西亞細亞の商人の手を経るが故に、價甚だ貴く、大秦人直ちに漢に通ぜんとすれば、安息人に妨げられしが、桓帝の時、大秦王安敦アントニウス海路より使を發し、日南郡今の安南國を経て、洛陽に達せり。皇紀八六六年これより大秦の商人、時々支那の南邊に至れり。

第四章 三國

漢末の亂

靈帝の時、黃巾の賊起り、國大に亂れ、ついで董卓の亂あり。

大秦王安敦

曹操

り、獻帝靈帝の子を脅して、長安に遷り、凶暴を極め、呂布に殺されたり。是時關東の豪傑は、董卓を討ずるが爲に兵を起して、遂に諸州に割據せるが中に、兗州今の山東西部の曹操は、獻帝を迎へ取り、天子を奉じて四方に號令し、河北の地を定め、又荊州今の湖南湖北を取れり。

劉備

孫權

赤壁の戰

時に、景帝の遠孫劉備、荊州に居り、諸葛亮と事を謀り、孫權に援を求めたり。孫權は、既に江南一帶を占領せしが、亮の策を用ひ、周瑜を將として、曹操の大軍を赤壁今の湖北武昌府嘉魚縣の下に撃ち破れり。これより劉備は、荊州を定めて、孫權と其地を分け、又益州今の四川を取り、成都今の四川成都府に都せり。

三國鼎立

こゝに支那の北部は、全く魏王曹操に屬し、南部の東は孫權、西は劉備に屬して、三分の勢をなせり。皇紀八八〇年、

漢の獻帝建安二十五年、西紀二二〇年、曹操卒し、子曹丕嗣ぎ、獻帝をして位を讓らしめて、皇帝となり、洛陽に都せり。之を魏の文帝と云ふ。漢は、高祖五年に帝となれるより、此年まで四百二十年なり。明年、劉備も帝と稱して、漢の皇統を繼げり。之を漢の昭烈帝と云ふ。後八年、孫權も吳帝と稱し、建業今の江蘇府に都せり。之を吳の大帝と云ふ。

諸葛亮の忠勤

三國の中、蜀は小國なれども、昭烈の寛仁と諸葛亮の忠勤とに由つて、魏吳と鼎立することを得たり。昭烈崩じて、後、亮は帝禪昭烈の子を補けて、先づ南夷今の雲南を定め、兵を鍊り糧を蓄へ、魏を撃ち破らんと欲し、凡て七たび祁山今の甘肅の西北和縣に出でたれども、志を得ずして歿したり。

司馬氏の專權

魏の司馬懿は、明帝文帝の子の時、屢諸葛亮を禦ぎ、又公孫淵を滅ぼして、平州今の奉天省、又韓國の北部を平げ、漸く權を專にし、懿

三國の末

の子師は、帝芳明帝の子を廢し、師の弟昭は、帝髦明帝の姪を弑し、又鄧艾等を遣して蜀を滅ぼさしめ、漢帝劉禪を降せり。これより昭の威望益高く、晉王に封ぜられて卒し、太子炎嗣ぎ、元帝文帝の姪をして位を禪らしめたり。之を晉の武帝と云ふ。皇紀九二五年、西紀二六五年。後十五年、吳も晉の杜預等に撃ち滅ぼされ、漢末の分裂より八十餘年にして一統せり。

第五章 晉、五胡十六國

八王の亂

晉の武帝は、皇族の諸王に兵權を與へて、藩屏の助を得んとしたるに、其子惠帝昏愚にして、賈皇后政に預かるに及んで、諸王兵を擧げて亂を作し、代るく政權を奪ひ、骨肉互に残害せり。之を八王の亂と云ふ。又魏の世より、老莊の説盛に行はれ、學者多くは禮法を蔑視し、世務を排棄し、専ら空理を談ずることを好み、晉に至り此風益甚しく、士

清談の流行

匈奴興る

東晉の偏安

大夫皆放達を尊び、國家の事を憂ふる者なし。かくて八王の亂の後、夷狄蜂起し、晉國の壞亂、救ふべからざるに至れり。

匈奴は、漢の世より支那に屬し、劉氏と稱して、并州今山西の北に居りしが、劉淵、劉聰、劉曜、皆文武の才あり、漢人多く之に歸し、皇紀九六四年西紀三〇四年、劉淵、左國城今山西汾州府永寧縣の東北に起り、漢王と稱し、後には皇帝と稱し、其後劉聰の兵は、洛陽を陷して、懷帝惠帝の弟を執へ、劉曜は、長安を陷して、愍帝懷帝の姪を執へたり。

こゝに司馬昭の姪孫、瑯琊王睿は、建康即ち建業にて帝位に即き、晉の統を継ぎたり。之を元帝と云ふ。建康は、洛陽の東南に在るが故に、この後を東晉の世と云ふ。東晉十一帝、百四年の間は、支那の北部は、争亂攘奪の衢となり、諸國の興

セシ

七種十八國の表

人種	國名	建國者及び著名なる帝王
匈奴種 <small>トルコ種</small> の祖	1 漢又前趙 <small>後趙に滅さる</small> 14 北凉 <small>魏に滅さる</small> 17 夏 <small>魏に滅さる</small>	劉淵 <small>淵の子</small> 、聰 <small>淵の子</small> 、曜 <small>淵の子</small> 沮渠蒙遜 赫連勃勃 <small>本姓は劉氏、劉淵の族</small>
羯匈奴の別部	3 後趙 <small>前燕に滅さる</small>	石勒 <small>勒の子</small> 、虎 <small>勒の子</small>
鮮卑 <small>蒙古種</small> の同類	5 前燕 <small>前秦に滅さる</small> 7 後燕 <small>北燕に滅さる</small> 9 西燕 <small>後燕に滅さる</small> 15 南燕 <small>晉に滅さる</small> 10 西秦 <small>夏に滅さる</small> 13 南凉 <small>西秦に滅さる</small>	慕容廆 <small>廆の子</small> 、皝 <small>廆の子</small> 、儁 <small>皝の子</small> 慕容垂 <small>儁の子</small> 、冲 <small>儁の子</small> 慕容德 <small>垂の弟</small> 乞伏國仁 秃髮烏孤

亡甚だ頻にして、記載するも煩はしけれども、それらの諸國を人種に由つて類別すれば左の如し。

氏 圖伯特種 の一種	6 前秦 6 後秦に 滅さる	拓跋珪 後魏の道武帝な り。後に見ゆ。
羌 圖伯特種 の一種	8 後秦 12 晉に滅 さる	姚萇 萇の興 子
巴蠻 苗越種 の一種	2 成後に漢 2 晉に滅 さる	李雄 雄の壽 從弟
漢人	4 前涼 4 前秦に 滅さる 16 西涼 13 北涼に 滅さる 18 北燕 16 魏に滅 さる	張軌 李暲 馮跋

國名の上なる數字は、その國の起れる順序を示し、下なる數字は、その亡びたる順序を示せり。

五胡十六國の稱

右の七人種の中、匈奴、羯、鮮卑、氏、羌を五胡と云ふ。五胡に巴蠻を加へて、六夷とも云ふ。又右の十八國の中、西燕は、國小くして早く亡び、魏は、後に北支那を一統して、僭偽の列

五胡の雄傑

十六國中の大國は、前趙後趙前燕前秦後燕後秦の六國なり。前秦王苻堅は、國治まり、兵強く、前燕前涼を滅ぼし、領地の廣きことは、晉に數倍し、東東西域六十二國朝貢するに至りしが、遂に晉を滅ぼさんと欲し、八十餘萬の大軍を率ゐて南征し、肥水今安徽鳳陽府壽州の東の戰に大敗して、狼狽して逃げ歸れり。晉の孝武帝太元八年、皇紀一〇四三年、西紀三八三年、これより國は忽ちに分裂し、身は後秦主姚萇に殺されたり。

肥水の戰

晉は、肥水の戰に勝つてより國力稍復したれども、劉裕國を専らにし、南燕後秦を滅ぼして、威名益加はり、遂に安帝を弑し、恭帝安帝の弟を廢して、位を奪へり。之を宋の武帝と

劉裕の篡奪

に加へられざるが故に、この二國を除いて、二趙前趙後趙四燕前燕後燕南燕北燕三秦前秦後秦西秦五涼前涼後涼南涼北涼西涼成夏を十六國と稱す。

魏の道武帝
武二帝

云ふ。皇紀一〇八〇年、西紀四二〇年。

北方には、鮮卑の拓跋珪、前秦の敗に乗じて起り、後燕を撃ち破り、盛樂今の山西より平城今の山西大同府に遷つて、帝位に陞れり。之を後魏の道武帝と云ふ。道武の孫太武帝、夏北燕北凉を滅ぼして、百餘年間羣胡の紛争始めて歇み、支那の全土は、宋魏の二大國に分れたり。之を南北朝と云ふ。

第六章。東方諸國高句驪、三韓、百濟、新羅の古史。

貊種

漢の玄菟郡今の京地方の北に、夫餘といへる貊種の國あり。

高句驪

今の奉天府の北部。前漢の末に、夫餘の人鄒牟、玄菟郡治なる高句驪縣の東、佟佳江の上流に國を立て、高句驪と名づけたり。美川王に至り、晉の衰亂に乗じて、樂浪今の平安道、帶方今の黄海道の二郡を并せられたれば、高句驪の領地は、韓種の諸國と接するに至れり。

三韓七十餘國

韓種は、韓國の南部に、古くより繁殖し、魏の頃は、馬韓、辰

韓、弁辰の三種に分れて、三韓と稱し、馬韓五十餘國は、今の

忠清、全羅二道を占めて、その内に百濟國忠清道稷山縣あり。辰韓

十二國は、慶尙道の東北部を占めて、その内に新羅國今の慶州府

あり。弁辰十二國は、慶尙道の西南部を占めて、その内に

加羅今の金海府、安羅今の咸安郡等あり。百濟は、鄒牟王の少子溫祚

の立てたる國にして、箕準の裔孫は、溫祚に滅ぼされたり

と云ふ。百濟、新羅の二國は、晉の世に至り、次第に隣國を併

呑して、韓中の大國となり、遂に高句驪と鼎立し、我が國に

ては、之をも三韓と云ふ。

三國鼎立

高句驪百濟の争

高句驪の故國原王美川王の子は、燕王慕容皝に丸都を壞ら

れて、國內城今の奉天府懷仁縣に遷り、南方に地を廣めん

として、百濟の近肖古王と兵を構へ、戰に死し、近肖古王は、

神功皇后の
征撫

勢に乗じて、北漢山今の京城の北なる三角山に遷り、高句麗に對抗せり。これより同祖の二國は、累世の仇となれり。この時に當り、神功皇后、新羅を征服し給ひしかば、近肖古王は、直に使を遣して朝貢し、永く屬國となれり。ついで朝廷より將を遣して、加羅安羅等の諸國を定め、總べて任那と云ひ、宰府を置いて統制し、我が國の威令、南韓に行はれたり。

廣開土王

長壽王の南
侵

高句麗の廣開土王故國原は、後燕の衰弱に乗じて、遼東を取り、百濟の侵地を復し、或は新羅に兵を出して、我が經略を妨げ、長壽王高璉廣開土王の子位を繼いで、平壤に遷り、國益強く、大舉して百濟を攻め破り、蓋鹵王を殺し、皇紀一一三九年、雄略天皇九年百濟は殆ど亡びんとせしが、雄略天皇の救護に由つて、國祚を保つことを得たり。高句麗は、高句麗とも書き、句を略して高麗とも云ふ。

大月氏の興
隆

第七章 大月氏、佛教の東流。

迦膩色迦王

大月氏は、前漢の末に、安息を破り、高附今の阿富汗國の都、罽賓今のカシミールを取り、中亞細亞の大國となれり。後漢の初に、迦膩色迦王立ち、ブルシヤ今のシベリアに都を定め、深く佛法を信じて、その獎勵に力を用ひ、都城の側に百丈の高塔を立て、又大夏の地には、希臘人多く居りし故に、堂塔佛像の建築雕刻に希臘の工人を用ひたれば、美術大に發達したり。

希臘の美術

第四の結集

中印度は、摩揭陀のマウルヤ朝亡びて後、婆羅門教二たひ勢を得たれば、佛教の中心は、北印度に移り、迦膩色迦王は、五百の高僧を罽賓に集め、世友を上座として、第四の結集をなせり。佛教は、早くより舊説を守る者と舊説に拘らざる者とありて、二十の小派に分れしが、この結集の後、舊説を破つて高尚なる道理を説く者多く、之を大乘と名づ

大乘小乘

佛教の東流

けて、舊説を守る者をば、小乗として卑みたり。馬鳴龍猛など云ふ高僧、この大乘の説を主張したれば、遂に印度全部に廣まり、至る所に大小乗の争論喧しくなれり。

佛教の支那に入りしは、迦膩色迦王の時にして、漢の明帝、使者を發して月氏に至らしめ、佛經佛像を求め、迦葉摩騰、竺法蘭の二僧を伴ひ歸れり。これより西域の僧徒、支那に入つて翻譯宣教する者多く、魏晉の世に至つて佛教大に行はれたり。五胡の君は、大抵佛教の信者なるが、その中にて翻譯に力を致したるは、秦王苻堅、後秦王姚興にして、姚興は、龜茲の高僧鳩摩羅什を尊寵して、羣僧と共に、經論數百卷を譯せしめたり。

三韓の佛教

苻堅、僧順道を高麗に遣りたるは、佛教の半島に傳はれる始めにして、後に高麗より新羅に傳はれり。百濟には、胡

佛教の南北派

僧摩羅難陀と云ふ者、晉より至り、枕流王近肖古王の孫之に歸依し、後百六十餘年にして、聖明王欽明天皇之を我邦に傳へたり。五十二年、かくて印度の東北に當れる諸國には、大乘の説多く行はれ、小乗教は、錫崙島よりビルマ、暹羅、ネー等に行はれたる故に、前者を北方佛教、後者を南方佛教とも云ふ。

第八章 南北朝、隋

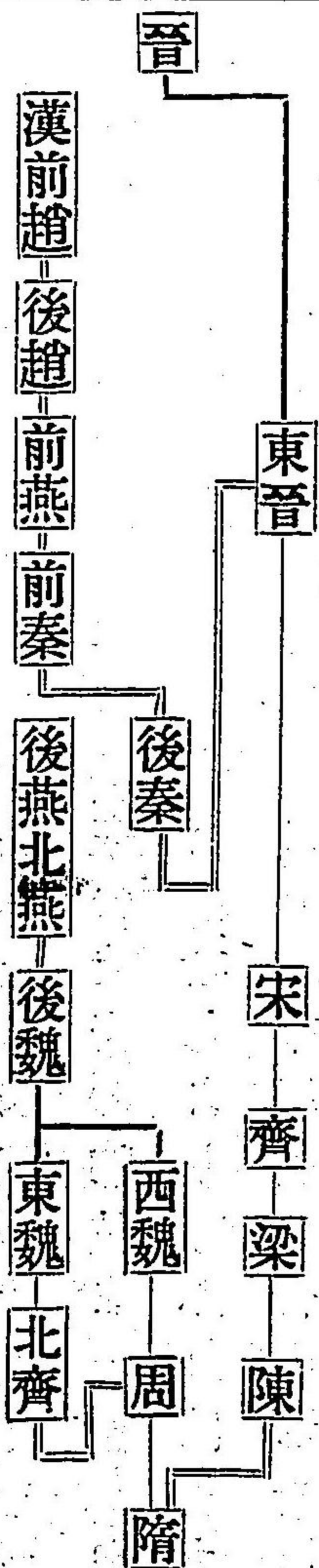
南北朝の年數

南北朝は、宋齊梁陳四代の南朝と後魏北齊周の三代に隋の未だ陳を并せざる間を加へたる四代の北朝とを云へるなり。この分裂の年數は、宋の武帝の即位より數ふれば、百七十年、魏の道武帝の帝と稱せしより數ふれば、百九十二年なり。漢主劉淵の獨立より以來、歷朝分合の形を圖にすれば左の如し。諸小國は省けり。

東晉南北朝分合圖

東晉南北朝分合の圖

大線は、統を継ぎたるなり。
細線は、禪を受けたりと稱して國を奪へるなり。
複線は、撃ち滅ぼしたるなり。



南北朝の篡弑

南北朝は、二大國又は三大國の對抗なれば、晉末の五胡紛争の如き混雜には非ざれども、篡弑廢立の頻なることは、前代にも後代にも比類なく、史を讀む者をして不快の感を起さしむ。八代五十四帝の中、廢弑の禍に逢はざる者は、二十人に過ぎざるを見れば、人道のいかに消滅したるかを想像するに足らん。

かゝる時代の歴史は、委しく述ぶるには及ばざれども、

後魏

孝文帝の改制

猶一二の記すべき事あり。後魏は、北狄より起り、英武の君は多けれども、風俗疎暴にして、政事嚴酷なりしが、第六主孝文帝は、學を好み、政を勤め、支那の文化を慕ひ、國俗の鄙陋なるを嫌ひ、洛陽に都を遷して、胡服胡語を禁じ、禮樂を興し、制度を定め、太平の風ありと稱せらる。されども是より武備漸く弛み、奢侈柔儒の風行はれ、魏の衰弱は、實に此時に萌せり。

梁の武帝父子

梁の武帝は、佛教の保護者として名高き君なるが、佛教のみならず、儒學をも好み、博學能文にして、著述數百卷あり。其子昭明太子、簡文帝、孝元帝の三人も、皆父に均しく才學あり。然るに武帝は、叛臣侯景に困められて死し、簡文は、侯景に殺され、孝元は、西魏の兵に攻められ、書萬卷を讀めども、猶今日ありとて、藏書十四萬卷を焚き、敵に降つて殺

東西魏

されたり。

高齊
宇文周

魏の東西に分れたるは、大臣高歡宇文泰の政權を争ひ、各帝を奉じて、鄴今の直隸彰德府と長安とに據れるが爲なり。高

歡の子洋北齊の文宣帝は、東魏を篡ひ、宇文泰の子覺周の閔帝は、西

魏を篡ひ、覺の弟周の武帝は、北齊を滅ぼして、魏の舊領を

隋の文帝

統べたりしが、崩じて三年ならざるに、隋の文帝楊堅に篡

はれたり、文帝即位の九年

崇峻天皇二年西紀五八九年

陳を滅ぼして、南

楊帝の驕奢

北一統せり。文帝の子煬帝、豪奢を好み、宮殿苑囿を造り、華麗を極め、

又運河を開き、馳道を通じ、屢巡遊して、民の困弊を顧みず、

又遠略を好み、南は林邑今の佛蘭西領コキンシムを平げ、西は吐谷渾鮮卑

の慕容氏の別部、を破り、又高麗の入朝せざるを怒り、百萬

隋亡ぶ

の師を發して親征し、大敗して還れり。これより國亂れ、豪

傑競ひ起り、煬帝は江都今の揚州府江蘇に遊び、叛臣に殺され、其子恭帝侑は、長安にて唐の高祖に位を奪はれ、恭帝侑は、洛陽にて王世充に殺され、隋は僅に四帝三十九年にして亡びたり。

第九章。唐の上。

唐の高祖

唐の高祖李淵は、太原今の山西太原府の留守となりしが、隋の

亂れたるを見て、其子建成世民等と兵を起し、進んで長安

を襲ひ、煬帝の東遊して居らざるに乗じ、恭帝侑を立て、そ

の讓りを受けて帝となり、隋の煬帝大業十四年、唐の高祖武

一八年、諸方に割據せる羣雄、王世充、竇建徳の輩は、皆世民の

力にて平げたり。然るに太子建成は、世民の功を嫉み、弟元

吉と共に世民を害せんことを謀りしが、世民先づ發し

て二人を殺し、遂に高祖の禪を受けたり。これ名高き唐の

太宗の即位

太宗の文治

太宗なり。

太宗の朝には、名臣甚だ多く、賢相には、房玄齡、杜如晦あり、良將には、李靖、李勣あり、王珪、魏徵は、諫諍を以て顯れたり。又儒を崇び、學を好み、學士を精選して、政事を議せしめ、太學を増築して、教育を獎勵したれば、四方の學者、長安に集まり、四夷の君長まで、子弟を太學に入れ、講義を聽く者八千餘人に至れり。

太宗の武功

貞觀太宗の年號の治は、秦漢以來比類なき太平と稱せられ、内治の美なるのみならず、外征の功も甚だ大なり。高宗太宗の子の世に至りても、謀臣猛將猶存し、唐の武威衰へざりき。
一、突厥。高祖兵を擧げし時、突厥の援を借りたるに由り、贈遺すること甚だ厚かりしかば、突厥益驕り、頻に唐を侵せり。貞觀四年舒明天皇二年、李靖等、頡利可汗を陰山に襲ひ、之

突厥

單于都護府

を擒にして、其國を滅ぼし、高宗の時、單于都護府を雲中今山西歸化城南に置いて、突厥の諸部を統べたり。

西突厥

二、西突厥。突厥の別部、高昌今の新羅鎮西府の西部の西北に居る者を西突厥と云ふ。貞觀十四年舒明天皇十二年、高昌を滅ぼせる時、西突厥の葉護大官の號、浮圖城今の新疆迪化府の東なる濟木薩を以て降りたれば、其の地を以て庭州とし、高宗の時、蘇定方等、西突厥を撃ち破り、沙鉢羅可汗を擒にし、武后の時に至り、庭州に北庭都護府を置いて、西突厥の諸部を統べたり。

鐵勒

三、鐵勒。貞觀二十年孝德天皇大化二年、李勣等、薛延陀鐵勒の一大部を降し、遂に鐵勒諸部を招諭し、燕然都護府を置いて、之を統べ、高宗の時、安北都護府と改め、單于都護府と沙漠を以て界とせり。

安北都護府

西域

四、西域。貞觀十四年、侯君集等、高昌を撃ち破り、安西都

安西都護府

青海吐蕃

護府を交河城今の新疆に置き、二十二年、大化四年、阿史那社爾等、龜茲を撃ち破り、高宗の時、安西都護府を龜茲に徙し、吐火羅大月氏の裔、嚙噠匈奴の別種、鬲賓即ちカ、波斯今の東、北等の諸國まで之に隸せり。

五、青海吐蕃。青海の地には、吐谷渾の南に党項あり、圖伯特種の別部なり。吐蕃は、今の西藏なり。西藏の人種を圖伯特と云ふは、吐蕃の音より起れるなり。貞觀の初に、党項先づ降り、九年、李靖侯君集等、吐谷渾を破り、十二年、侯君集等、吐蕃を破り、二國皆降附せり。

印度

六、印度。二十二年、王玄策、印度に使し、中印度の王阿羅那順に攻められ、吐蕃泥婆羅即ち印度のの兵を發して、阿羅那順を撃ち破り、擒にして歸れり。

南海

七、南海。南海の諸國も多く朝貢せし故に、高宗の時、交

安南都護府

三韓

州今の河内の都督府を安南都護府と改めて、之を統べたり。八、三韓。唯高麗の征伐のみは、太宗の失敗にして、自ら大軍を率ゐて、一舉して平げんと欲したれども、安市城今の奉天府蓋平縣の東北にて支へられ、功なくして歸れり。されども高

安東都護府

宗の時、蘇定方、劉仁軌等、百濟を滅ぼし、李勣、高麗を滅ぼし、安東都護府を平壤に置いて、其地を統べ、ついで遼東に徙せり。新羅は、始終唐に臣事せり。

東北夷

九、東北夷。契丹、奚、靺鞨三種皆東胡の裔、今の室韋、後の蒙古人の祖、靺鞨トングス種、今の、諸部は、皆貞觀の初に内附せり。

日本

十、日本。我邦は、唐に臣事せるには非ざれども、遣唐使學生、學僧を屢遣したるは、唐の文化を欽慕したればなり。

威令の及ぶ所

都護府の名は、漢の西域都護より出でたれども、漢は唯西域に置けるのみなりしが、今は四邊に安東、單于、安北、北

庭安西安南の六都護を列置して、威令の及ぶ所甚だ廣く、東は韓の半島より、西は中亞細亞に至り、南は林邑を過ぎ、北は骨利幹鐵勒の一部、今のエニセーリスクの地に及べり。

周の女帝

高宗の皇后武氏、性明敏にして、權略あり、高宗崩じ、子中宗を立て、又之を廢し、次の子睿宗を立て、遂に唐の宗室貴戚數百人を殺し、睿宗を廢して、自ら聖神皇帝と稱し、國號を周と改めたり。持統天皇四年、西紀六九〇年、後十五年、文武天皇慶雲元年、西紀七〇五年、宰相張柬之等、武后の老病に乗じて、中宗をして位に復らしめ、此年武后崩じたり。

章后の亂

中宗の皇后韋氏も、政事に預かること武后の如くなりしが、遂に中宗を弑して、國を擅にしたれば、睿宗の子隆基、兵を起して、章后を殺し、睿宗を立て、元明天皇和銅三年、西紀七一〇年、後二年、睿宗の讓りを受けたり、之を玄宗と云ふ。

第十章 唐の下

開元の隆盛

玄宗即位の初、精を勵まし、治を圖り、奢侈を戒め、姚崇宋璟に政を委ね、國富み兵強く、文學技藝並び起り、開元の隆盛は、貞觀と並び稱せられ、唐の賢相を擧ぐれば、前には房杜、後には姚宋なりと云ふ。然るに後には、佞臣李林甫を用ひ、又楊貴妃を寵愛して、奢侈を極めたれば、政事紊れて、武備弛み、遂に安祿山の叛亂を致せり。玄宗の年號、初は開元、後は天寶と云ひ、開元の治と天寶の亂とは、その反對せること、一人の世に非ざるが如し。

天寶の亂

藩鎮の始まり

高宗の時、吐蕃を禦がんが爲に、河西の節度使を置きしが、玄宗に至り、四邊の要地に皆節度使を置き、總べて十鎮あり、何れも數州の地を領し、兵權と民政とを兼ねたれば、唐の威勢は、二たび塞外に張りたれども、藩鎮の權重きに

安祿山の叛

755
756
1915

大亂の平定

忠節の臣

過ぎて、制すべからざるに至れり。
 安祿山は、胡人なり。狡黠にして勇略あり、巧に玄宗の近臣に賂ひ、河北二鎮の節度使となり、又楊貴妃の黨に結び、河東の節度使をも兼ね、その兵力を負んで、遂に反を謀り、天寶十四年、孝謙天皇天平勝寶七年、西紀七五五年三鎮と奚契丹との兵十五萬を引て南し、洛陽を陥し、明年長安を陥せり。
 玄宗狼狽して蜀に奔り、肅宗玄宗の太子の位に即き、郭子儀李光弼等の力に依り、兩京を收復せり。安祿山は、其子慶緒に殺され、慶緒は、其將史思明に殺され、思明は、又其子朝義に殺されたり。肅宗崩じ、代宗肅宗の太子の立ち、諸將を遣して史朝義を撃ち滅ぼし、八年に涉れる安史の亂始めて平ぎたり。此亂の時に勳功最も大なるは、郭子儀李光弼にして、顔真卿、顏杲卿、張巡、許遠は、皆義兵を起し、忠節を以て著れたり。

兩河の五鎮

憲宗

宦官の暴横

文宗

十節度は、本四邊の要地にのみ置かれしが、安史の亂に、河南今の山東江淮の地にも節度使を置き、史朝義の平ぎし時、賊の降將を用ひて、河北の地に藩鎮を竝べ立てたり。これよりして河北三鎮、幽州、魏博、成德河南二鎮、淄青、淮西驕横にして、朝命を奉ぜざりしが、憲宗代宗の曾孫の英武にして、武元衛裴度等の賢相を用ひ、淮西今の河南汝寧府を平げ、淄青今の山東青州府を平げて、河北三鎮も威令に遵へり。されども晩年心驕つて終りを全うせず、宦官に弑せられたり。
 唐の宦官は、中宗玄宗の時より漸く盛になり、代宗の子德宗に至り、禁軍を主らしめ、且樞密の職を置いて、政務に參預せしめられたれば、宦官の專横は、後漢よりも甚しかりき。憲宗既に弑せられ、憲宗の太子穆宗は、宦官に立てられ、穆宗の太子敬宗は、又弑せられて、敬宗の弟文宗を立てられ、宦官を誅せんとして事成らず。

却て宦官の暴威を高め、大臣多く殺されたり。この後武宗宣宗懿宗僖宗昭宗の五帝、相踵て宦官に立てられたるが中に、武宗は英邁にして、澤潞潘鎮の名、今の山の西澤州府、潞州府の叛を平げ、宣宗も明君にして小太宗と稱せられたる程なれども、河北三鎮は、殆ど化外に同じく、内は宦官に制せられて、主威を立つること能はざりき。

武宗
宣宗
黄巢の亂
李克用
朱全忠
唐亡ぶ

僖宗の時、黄巢と云ふ賊起り、數年の間諸道を侵掠し、遂に長安に入り、僖宗蜀に奔りしが、沙陀西突厥の別部の李克用之を平げ、功を以て晉王となれり。これより國大に亂れ、黄巢の將朱溫は、唐に降つて全忠と名を賜はり、汴州今の河南に據り、開封府に入り、宦官數百人を殺し、昭宗を洛陽に遷し、ついで之を弑して、其子哀帝を立て、醍醐天皇延喜七年西紀九〇七年、遂に其位

を篡へり。唐の高祖より哀帝まで二十世二百九十年なり。

第十一章 東方諸國百濟高麗新羅渤海の盛衰。

百濟の南遷
聖明王の戦死
隋の文帝の東征
煬帝の大敗

雄略天皇の時、百濟の蓋鹵王は、高麗の軍に殺され、弟汝洲王は、熊津忠清道公州に徙りしが、蓋鹵の姪末多は、皇軍に護送せられ、往て其國を興復し、聖明王末多王の姪に至り、都を泗泚忠清道扶餘縣に定めたり。欽明天皇十二年西紀五二一年、聖明王、高麗を破つて、漢城を復したれども、守ること能はずして、明年新羅に取られ、十五年、新羅を撃つて、戦に死し、二十三年、新羅我が任那を滅ぼし、百濟益、援を失へり。
推古天皇六年隋の文帝開皇十八年、西紀五九八年、高麗人、遼西今の奉天省錦州府を侵したるに由り、隋の文帝、三十萬の兵を發して撃ちたれども、克たず、二十年隋の煬帝大業八年、西紀六一二年、煬帝が百萬の師は、高麗の乙支文徳に見事に撃ち破られ、明年もその明年も

又撃ちたれども、皆功なく、隋は、總べて四たび征して、唯高麗の名を成せり。

唐の太宗の東征

唐の太宗、高麗の泉蓋蘇文、その主策留を弒し、高藏を立て、權を擅にすと聞き、大軍を興して、遼東の野を蹂躪したるが、安市城を圍むに及んで、半年攻むれども拔けず、糧食の盡くるを恐れて、師を還せり。孝德天皇大化元年、唐の貞觀十九年、西紀六四五年。

百濟滅ぼさる

興復の事成らず

新羅百濟は、世々仇敵となり、百濟は、素より我邦に親附し、新羅は、新に唐に結び、その援を求めたれば、齊明天皇六年、唐の高宗顯慶五年、西紀六六〇年。蘇定方、大軍を率ゐて海を渡り、泗泚を抜き、百濟王義慈を降せり。天智天皇、藩國の覆滅を傷み給ひ、軍を遣して、百濟の遺衆を援けしめ、我邦に留れる王子餘豐義慈の弟を送り還して、王位を嗣がしめ給ひしが、癸亥の年、天智天皇即位前五年、唐の龍朔三年、西紀六六三年。我が援軍、白江口に敗られ、餘豐

高麗滅ぼさる

は、高麗に遁れて、百濟亡びぬ。

高麗にては、泉蓋蘇文死して、三子の争ひありしが、天智天皇元年、唐の總章元年、西紀六六八年。李勣、平壤を圍み、高藏を降し、安東都護府を置て、高麗百濟の故地を統べたり。其後高麗の遺衆復起り、新羅人之を援け、唐の兵を逐て、平壤以南の地を取りたれば、安東都護府は遼東に徙れり。されども新羅は、猶唐に臣事し、世々その官爵を受けたり。

新羅亂れ高麗興る

其後二百餘年、宇多天皇の時、新羅亂れ、弓裔は鐵原江原道鐵原に據り、泰封王と稱し、甄萱は完山全州に據り、百濟王と稱し、韓地復三に分れ、後二十四年、醍醐天皇延喜十八年、西紀九一八年。鐵原の衆、弓裔を逐て、王建を立て、國を高麗と號し、松岳京城畿道開城府に都す。之を太祖神聖王と云ふ。後十餘年、新羅、百濟、皆高麗に降れり。

靺鞨

渤海の大氏

靺鞨は、今の滿洲人の祖先なり。唐の世二大部あり、黒水今ノ黒龍江の邊に居る者を黒水靺鞨と云ひ、粟末水今ノ松花江の邊に居る者を粟末靺鞨と云へり。高麗亡びて後、粟末部の人大祚榮、高麗靺鞨の衆を合せ、桂婁の故地郡牟王創に據つて國を立て、玄宗の封を受けて、渤海郡王となり、元明天七年、西紀七、一、三年、これより渤海を以て國號とせり。其孫欽茂、忽汗河今ノ虎爾哈河の東に徙り、東方の盛國となり、世々我邦に朝貢せり。祚榮國を立て、より、十四世二百二十餘年にして、遼の太祖に滅ぼさる。

第十二章 北西諸國突厥、鐵勒、波斯、大食、吐蕃、印度の盛衰

柔然

一、突厥。後漢の世、匈奴衰へてより、鮮卑蔓延して、塞外に遍かりしが、晉の世、鮮卑の諸族は、多く支那に入りたるに因り、匈奴の別種柔然、沙漠の北に起つて、大國となれり。

突厥

木杆可汗

突厥も匈奴の別種にして、姓は阿史那氏、世々金山アルタの南に居り、柔然の鐵工となりしが、土門可汗始めて柔然に叛き、その子木杆可汗、剛勇にして智略多く、柔然を撃ち滅ぼし、西は嚙噠トラスを取り、東は契丹を走らし、北は結骨今ノキルギス人を并せ、都斤山杭愛山の分支に本營を置き、族人を立て、小可汗とし、各部衆を統べしむ。從弟達頭可汗、西面に居り、所部最も廣く、其地、後には本部と分れて、西突厥となれり。

頡利可汗

トルコ人種

隋唐の間、突厥甚だ強く、割據の羣雄、皆臣と稱して、其力に倚れる程なりしに、頡利可汗、奢侈を好み、且戰爭を事とせるに由り、内外皆怨み、鐵勒諸部相率ゐて叛き、遂に唐の將に擒にせられ、高宗の末年、突厥の餘類復起りたれども、天寶の初、回紇に攻められて、遂に亡びぬ。突厥は、トルクの音を表はせるなり。トルク人の名は、東西に高かりし故に、こ

れより突厥の同類なる鐵勒結骨諸部も、すべてトルコ人種と云ふなり。

西面可汗と東羅馬との交通

統葉護可汗

二、西突厥。木杆可汗、既に嚙嚙を并せ、西面の達頭可汗は、波斯と貿易せんとしたるに、波斯人従はざるに由り、東羅馬國に好を通じ、東羅馬帝も、使を發して突厥の帳に至らしめ、兩國親和して波斯を圖れり。達頭の孫統葉護可汗、北は鐵勒諸部を并せ、西は波斯を破つて屬國とし、本營を千泉塔刺斯河の上流に定め、中亞細亞諸國の王に官を授け、吏を遣してその租税を督せり。

沙鉢羅可汗

突騎施

貞觀中、統葉護は、叔父に殺されて國亂れ、族人阿史那賀魯、其國を奪ひ、沙鉢羅可汗と稱せしが、蘇定方等に擒にせられ、高宗其國を二部に分けて、各可汗を立てたれども、治らず、其後別部突騎施其地に據り、天寶以後、突騎施衰へ、北

葛邏祿

庭に居る葛邏祿稍盛にして、代宗の時、突騎施の地を奪ひ、碎葉川今の珠河に徙れり。これ蒙古の時に著はるゝ、柯耳魯種なり。

鐵勒

三、鐵勒。鐵勒は、本漠北に散處し、薛延陀回紇葛邏祿等の數十部あり、兩突厥に分屬せり。貞觀中、薛延陀回紇は、頡利可汗の兵を破り、ついで回紇の部長吐迷度、薛延陀を破り、鐵勒十一部を率ゐて唐に降り、燕然都護府に隸せり。

回紇

天寶の初、突厥衰へ、回紇代つて其地を有ち、烏德鞬山蒙外古賽因諾顏部の境内に本營を置き、葛邏祿等十一部を統べ、安史の亂の時、肅宗代宗、皆その援を借りたれば、回紇を遇する事甚だ厚く、三たび皇女を降してその可汗に妻せたり。文宗の時、回紇衰へ、黠戛斯に破られ、餘衆散亡して、天山の南に奔れり。これ蒙古の時に著はるゝ、畏兀兒種にして、今新疆

回紇の西遷

黠戛斯

省の山南に住する回部は、皆其裔なり。結骨も黠戛斯も、皆キルギスの音を表はせるなり。この種族は、回紇の北に居りしが、回紇を逐て南に徙り、杭愛山阿爾泰山の地に住し、蒙古の時に乃蠻部乞兒吉思部として著はる。今キルギス諸部の中亞細亞に居るは、元代の後に西に徙れるなり。

波斯の薩山朝

四、波斯。皇紀八八四年西紀二四四年、波斯の人アルダシル、安息國を滅ぼして、諸王の王と稱せり。之を波斯の薩山朝と云ふ。薩山朝は、國を有つこと四百餘年、屢東羅馬と戦ひ、勝敗相當りしが、ユスルー第二の時、西突厥の統葉護可汗に困められ、國大に衰へたり。舒明天皇四年唐の貞觀六年、西紀六三二年、イスチゲルト第三の立てる時は、統葉護既に死して、西突厥の厄を免れたれども、大食人に逼られて、國忽ち破れ、其子卑路斯、暫く呼羅珊を保ちたれども、支へずして唐に入り、薩山朝

薩山朝亡ぶ

大食即ちサラセン國

亡びたり。

五、大食。大食は、摩訶末の興せるサラセン國を唐人の呼ぶ名なり。摩訶末は、亞刺比亞の默迦に生れ、猶太教と基督教とを参考して、新に宗教を始め、默地那より兵を起して、國を建て、舒明天皇四年歿し、位を繼ぐ者を哈利發と云ふ。哈利發オーマルは、波斯を破り、オスマンは、其地を定め、オマヤ朝起り、齊明天皇七年、西紀六六一年、ダマスカスに徙り、エリット第一は、河間錫爾河と阿母河との間の地を并せて、唐の北庭安西の地と界を接し、阿拔斯朝起り、孝謙天皇天平勝寶元年、唐の報達に徙れり。これより波斯の地は、摩訶末教の中心となり、トルコ人種の其地に移住せるものは、皆その教徒となれり。

阿拔斯朝

阿拔斯朝の哈利發は、屢唐と交通し、安史の亂には、援兵を送れり。哈利發訶論は、學術を興し、文化を進めたる名君

大食の衰亂

なりしが、其子ムア多スンの時、トルコ人を用ひて親軍としたるより、親軍次第に勢を得て、廢立を擅にし、哈利發の權衰へ、諸侯割據し、唐の末には、其國大に亂れたり。

吐蕃

六、吐蕃。唐の初に棄宗弄贊と云ふ王あり、印度に交つて佛教を獎勵し、又太宗の宗女を娶り、唐の文物を採用せり。その後の王は、吐谷渾を滅ぼし、党項を逐ひ、國益強く、屢唐の地を侵したるが、唐の衰へたる頃は、吐蕃も衰へたり。

印度

七、印度。大月氏の衰へたる後、中印度の曲女城今の西州に笈多朝起り、月氏の種族を逐ひ出したるが、後に嚙噠カニ人に滅ぼされたり。嚙噠は、匈奴の別種にして、バダクシャンに居り、その盛なる時は、印度の地をも領せしが、鄯闐衍尼國今のラーヂプタの超日王に逐ひ出され、遂に突厥の木杆可汗イナのウキインに併せられたり。超日王は、武威の盛なるが上に、學者詩人

嚙噠

超日王

戒日王

多く其朝に集り、文學の盛なりし世と稱せらる。

その後曲女城に戒日王起り、佛教を興隆し、號令は殆ど全印度に及び、遊學僧玄奘より唐の盛なるを聞き、使を遣して朝聘せり。戒日王歿し、權臣阿羅那順篡立し、唐の使者王玄策を攻め、却て玄策に擒にせられたり。これより印度は、復分裂して、列國互に攻め争ひ、又婆羅門教は變じて、溫都教となり、ラーヂプト族と稱する西方の諸侯、皆之に歸依して、佛教は次第に衰へたり。

溫都教

漢儒訓詁の學

第十三章 漢唐の儒學文藝

漢代の儒者は、秦の始皇の詩書を焚きたる後を受け、古書を拾ひ出して世に傳ふる事を以て要務とし、専ら文字の解釋に力を用ひたり。之を訓詁の學と云ふ。又古書の解し難きに由り、一人にて數部の經に通ずる者なく、皆一經

専門の師傅

を以て専門の業とし、皆師の説をその儘に己れの弟子に傳へて、取捨すること無し。

後漢の鄭玄

後漢の世に至り、一人にて數部の經を修むるものあり、數家の説を折衷するもあり、學問は次第に博くなり、馬融鄭玄の如きは、何れの經にも通ぜざること無く、鄭玄は、諸經に皆委しく註釋を施せり。鄭玄の後に、魏の王肅の三禮註、王弼の周易註、何晏の論語註、晉の杜預の左傳註の如き名高き註もあれども、鄭玄の註は、最も世に重んぜらる。

魏晉の註家

五經正義

晉宋以後の儒者は、古註に従ひ經を解するのみにて、經に關する著述の多くは、疏と稱する孫註なり。唐の太宗は、孔穎達等に命じて、五經の疏を作らしめて、正義と名づけ、官吏登用の試験には、必ず正義に従はしめられたれば、唐の儒者の經學は、殆ど唯正義を諳記するのみとなれり。

漢唐經說の差異

又經義に於ける學者の好みは、漢と唐と異なり。例へば、詩の四家中、漢代には、齊魯韓の三家を用ひ、後世は毛詩のみ行はれ、その外の經說も、兩漢に教科として用ひられたる者にて、唐代に行はれざる者多し。故に同じく五經と云ひても、兩漢と唐と同じからざること、左の如し。

漢唐の五經

	詩	書	易	禮	春秋
兩漢	齊魯韓詩	今文尙書	田氏易 <small>施孟梁丘京氏易</small>	儀禮	春秋公羊傳
唐	毛詩	古文尙書	費氏易	禮記	春秋左氏傳

九經

唐の五經は、右の如くなれども、猶禮記の外に儀禮周禮をも用ひて、三禮と云ひ、左傳の外に公羊傳穀梁傳をも用ひて三傳と云ひ、毛詩尙書周易の三經に三禮三傳を加へて九經と云へり。官吏登用の試験には、九經の内を用ひて、論語孝經は、必ず兼ねる定めなり。この十一部に孟子爾雅

十三經

孟子

を加へて十三經と云ふは、明以後の名なり。

韓愈

孟子は、唐の世までは、諸子に列して、經には加へられざりしが、韓愈が、その楊墨を黜けたる功を推尊してより、世人始めて之を重んずることを知れり。韓愈の、佛老の説を排撃したるは、蓋孟子の風に倣へるにて、憲宗の佛骨を迎ふる時に、上書して、之を水火に投ぜんと請ひたるは、名高き談なり。

西漢の文人

西漢の世、賈誼は論策に長じ、司馬遷は敘事に長じ、司馬相如は辭賦に長じ、皆絶世の才なりしが、其後文藝益盛に、能文の士多く出でたれども、賈誼司馬遷に似たるは少く、大抵相如に倣うて至らざる者にして、辭句を美麗に飾ることをのみ務めたり。東漢以後詩文の最も妙なるは、班固の漢書、建安七子の詩、陶淵明の詩なり。建安七子とは、曹操

東漢魏晉の詩文

唐詩の隆盛

の子曹植とその友六人とを云ふ。陶淵明の詩は、淡泊の中に情あり味あり、實に六朝吳晉宋齊梁陳の第一なり。

韓柳の古文

唐の初は、官吏登用の試験に、經學を主とする明經と詩賦を主とする進士とありしが、後には明經衰へて、進士となる者立身早かりし故に、詩賦の學大に起り、玄宗の時には杜甫李白など云ふ名人顯れて、古今に比類なき隆盛を致せり。其後韓愈起り、雅正の文を以て世を導き、六朝の陋習を一變し、之に次では、柳宗元も、古文の大家なり。韓柳の二人は、詩も巧なれとも、文の名に掩はれて、詩人としては稱せられず。かくて杜甫の詩と韓愈の文とは、唐代の第一なるのみならず、實に支那の第一なり。

杜詩韓文

第十四章。佛教、道教、諸西教、南海の貿易。

一、佛教。苻堅姚興の時、西域の高僧多く長安に入りし

僧徒の西遊

佛教全盛の時代

より、北方の僧徒、印度に遊學せる者も少からず。中にも法顯は、三十餘國を歴て、南海より歸り、佛國記を著して、その遊歴の跡を遺せり。南北朝は、佛教全盛の時代にて、西僧の來る者益多く、禪宗を創めたる菩提達磨、起信論を譯せる眞諦は、皆梁の時に、海路より至れり。天台宗の本山なる天台山の國清寺は、智者大師智顛の創立にて、隋の煬帝の保護に成れり。唐の太宗の時、玄奘は、五印度に遊歴し、經論六百餘部を得て歸り、七十六部を翻譯し、玄奘の弟子義淨も、印度に往き、二十五年を経て歸れり。この頃は、陸よりも海よりも印度に往く者甚だ多かりき。

佛教の宗派

唐の初は、宗派甚だ多く、鳩摩羅什以來の三論宗、達磨の禪宗、智顛の天台宗の外に、法順の華嚴宗、玄奘の法相宗、道宣の律宗、印度より渡れる金剛智等の眞言宗など起り、玄

三武の禍

宗は、最も眞言宗を崇び、祈禱咒ひ盛に行はれしが、唐の末には、諸宗稍衰へ、禪宗のみ蔓れり。かく佛教の盛なる時代に、寺を毀ち、僧を困めたる帝王三人あり、魏の太武帝、周の武帝、唐の武宗なり。之を三武の禍と云ふ。

道教の起り

二、道教。神仙の説は、戰國より起り、秦の始皇、漢の武帝など深く信じ、其後方士の徒は、道家の説を取つて、仙術に引き付け、自ら道士と稱し、老子を推して天仙の長と仰ぎ、晉南北朝の際、道教稍盛に、常に佛教と競争せり。唐の帝王は、老子を國祖として、諸州に廟を立て、道士を遇すること甚だ厚く、武宗の佛寺を毀ちたるも、道士の説を用ひたるなり。

唐の道教

祇教

三、祇教。波斯の國に、上古よりゾロアストルの宗教あり、明暗の二神を立て、火を以て明の神を表して崇拜せるが

故に、事火教と云ひ、支那にては祆教と云ふ。祆教は、北朝の時既に支那に入りしが、唐の初、長安に祆神の祠を立て、胡人を神官として、祭祀を掌らしめたり。

摩尼教

四、摩尼教。皇紀第九世紀の末、薩山朝初頃波斯の人摩尼と云ふ者、基督教と祆教とを參酌し、佛説をも雜へて、一宗教を創めたり。之を摩尼教と云ふ。摩尼教は回紇に行はれ、唐にも入り、諸州に摩尼寺起れり。

景教

五、景教。景教は、基督教の一宗派なり。皇紀第十一世紀の末、西紀四三〇年の頃に、東羅馬の教主ネストリウス、新義を唱へて、教會より放逐せられ、其徒堅く師説を守り、ネストリウス宗と稱し、波斯の地に行はれ、百年ならざるに、印度、中亞細亞に廣まれり。その宗旨の支那に入りたるは、唐の太宗の時にして、唐人は之を景教と云ひ、太宗高宗は、之が爲に寺を

立て、波斯寺と名づけしが、玄宗の時に大秦寺と改めたり。

三夷寺

右の祆教、摩尼教、景教は、皆西亞細亞より傳はれる者にして、それらの寺を佛徒は三夷寺と云へり。武宗の佛教を黜けたる時に、三夷寺も皆廢せられ、これより三教ともに衰へ、唯回紇西域には猶殘れり。

支那の商船の西航

吳晉の世、印度洋を往來するは、大秦國の商船のみなりしが、南朝の諸帝、佛教を尊び、印度以東の佛教諸國と交通開けてより、支那の海運漸く興り、唐の世には、閩廣の商船は、閩婆、獅子國を経て、波斯灣にも往いて貿易せり。然るに、大食國興つて、西亞細亞の沿岸より、信度河口の諸港まで、その領地となりたれば、阿刺比亞人は、猶太人、波斯人と共に、次第にその航路を廣め、支那の南海に入り、廣州、泉州、杭

大食國の商船の東航

市舶司

州の諸港に貿易するもの多く、唐は市舶司と稱する商船取締所を設けて、海關稅を徵收せり。唐亡びて後は、大食も亂れ、海上の貿易は衰へたり。

第十五章 五代

五代の亂

梁

後唐

晉

五代五十三年に、唐末三十年許を加へ、八十餘年の間は、争亂攘奪の烈しきこと、五胡十六國の亂にも劣らざりき。五代とは、梁、後唐、晉、漢、周を云ふ。梁の太祖は、黃巢に従つて賊をなせる朱溫、即ち朱全忠にして、開封即ち汴州、今の河南省の首府に都し、其子友貞は、後唐の莊宗に滅ぼさる。莊宗は、沙陀の李克用の子にして、洛陽に遷り、明宗克用の養子、閔帝明宗を歴て從珂、明宗の養子に至り、晉の高祖に滅ぼさる。晉の高祖は、沙陀の石敬瑭にして、後唐の將なりしが、契丹の太宗に臣と稱して、援兵を借り、太宗の命を受けて、晉帝となり、後唐を

燕雲十六州

滅ぼして、燕雲十六州今の直隸山西の北部を契丹に奉り、其子重

漢

周

630
636
645
650
656

明君唯二人

貴は、契丹に叛いて滅ぼさる。契丹の太宗、支那を棄て、歸れる後に、晉の舊將なる沙陀の劉知遠、自立して漢の高祖となり、其子隱帝は、其將郭威に滅ぼさる。郭威は、周の太祖となり、養子世宗は、英武にして支那を一統する望みありしが、早く崩じ、其子恭帝は、宋の太祖趙匡胤に篡はる。村上天皇天德四年、西紀九六〇年、晉の高祖、汴京に入つてより宋の世まで、汴は常に支那の都となれり。

五代の十國

五代の君は、皆武人にして、梁は盜賊より起り、後唐、晉、漢は、夷狄より起り、その中にて明君と云はれたるは、後唐の明宗と周の世宗とのみなり。

漢、西に後蜀、南に荆南、湖南、南唐、吳越、南漢あり。前後合せて十四國燕、晉、岐、蜀、後蜀、荆南、楚、湖南、吳、南唐、吳越、閩、南漢、北漢あれども、燕岐は一代限りにて亡びたれば省き、晉は即ち後唐となりたれば數へず、楚と湖南とは同じ所なれば、一國と見なして、五代の十國と云ふ。後蜀以下の六國は、皆宋の太祖に降り、北漢のみは、太宗の時に至り滅ぼされたり。

第十六章 北宋

武人の驕横

唐の中世以來、藩鎮驕横にして、五代に至り、益甚しく、州縣の政は、盡く武人に歸し、天子の廢立までも、武人の手にて擅にせり。即ち宋の太祖も、周の禁軍の帥なりしが、恭帝の幼きに乗じ、部下の將士、無理往生に黃袍と云ふ天子の服を太祖に着せて、帝としたりと云ふ。太祖は、武人の權重きを憂へ、趙普と謀り、先づ禁衛の宿將に諭してその兵權

を解く

藩鎮を罷む

禁軍と邊備

を解かしめ、節度使の缺くる毎に、文臣を以て知軍州事として、之に代らしめ、遂に藩鎮の諸州を領することを罷めて、三百餘州は、皆朝廷に直隸し、又禁軍の衆を増して、邊城の警備は、禁軍より出すことにせり。これより五代武斷の風革まり、生民休息することを得たれども、宋の兵力の弱きことも、こゝに萌せり。

宋遼の釁

澶州の役

太祖嘗て遼契丹と好みを通じたりしが、弟太宗、北漢を滅ぼせる勢に乗じて、遼の南京北京を圍み、高粱河の大敗ありき。眞宗太宗の子の時、遼の聖宗、大軍を率ゐて、澶州今大名府開の三面を圍み、宋の宰相寇準は、眞宗に親征を勧めて、澶州城に入りたれば、兩國の天子、城の内外に相對し、いかなる激しき戰あらんかと見えしに、兩朝の間に和議起り、宋を兄とし、遼を弟とし、宋よりは年々銀十萬兩、絹二十萬

仁宗の治

匹を遣る約束にて、兵解けたり。一條天皇寛弘元年、西紀千四年。

名臣名儒

仁宗真宗の子は、恭儉にして民を愛し、賢人を登用し、學術を奨励し、宋代第一の仁君として、漢の文帝と並べ稱せらる。

西夏の建國

此時名臣には、韓琦、范仲淹、富弼、歐陽修、司馬光等あり、名儒には、胡瑗、周敦頤、邵雍、張載、程顥、程頤等顯れ、人才の盛なること、古今に希なり。されども宋は、本文治を尙べる國にして、武功の觀るべき者なし。唐の末より党項の李氏、夏州今内蒙古鄂爾多斯部の南部に據り、李繼遷に至り、遼の聖宗に降つて、夏

歳幣歲賜

王に封ぜられ、其子德明は、宋遼二國に臣事せしが、仁宗の時、德明の子元昊、回紇を撃つて、河西の地を取り、興慶今寧夏府に都して、夏帝と稱し、連に宋の西邊を侵せり。是時遼の興宗聖宗の子は、宋の邊備を修むるを責めて、南侵の勢を示したれば、宋は歳幣の銀絹各十萬を増して、和親を續け、後

又元昊の願を納れ、毎年銀絹を賜ふ事を約して封冊を受けしめたり。

神宗の雄心

神宗仁宗の養子、英宗の子は、少くして雄心あり、四夷を征伐して

王安石の新法

國威を張らんと欲して、財貨の足らざるに困み、王安石に政を委ねて、富國の策を講ぜしむ。安石即ち、呂惠卿等と謀り、青苗法とて、植附の時に農民に錢を貸して利息を取る事、均輸法、市易法とて、價のさがれる物品を買ひ上げて商賣する事、其外種々なる新法を行ひたれば、名臣富弼、司馬光以下、皆之を非とし、或は官を辭して去り、或は安石に斥けられ、賢人正士の朝廷に留まる者なく、安石等は、小人を擢用して、新法を勵行し、國民皆怨み、四方騷然たり。

君子小人の消長

外征の失敗

又神宗は、富國の實效も舉がらざるに、四方に事を起して、大抵失敗せり。

河湟の役

一、河湟の地を吐蕃より奪ひ、地は廣まりたれども、兵士の死亡多く、且吐蕃の寇患を招けり。

安南の丁氏

二、五代の末、安南唐の安南都護府の故地の丁部領、自立して皇帝と

稱し、其子丁璉、宋に朝貢し、交趾郡王に封ぜられ、それより

交趾は、名ばかりの屬國となり、その君は、世々支那の封爵

を受くれども、國中にては、天子の制を用ふ。丁璉の弟は、黎

氏に國を奪はれ、黎氏は、李氏に奪はれ、李氏は、國を大越と

安南の役

名づけたれども、支那にては、交趾又は安南と云ふ。神宗、安

南を圖らんとして、李乾徳の入寇を致し、郭達等を遣して

撃ち破りたれども、宋軍の死せる者、半に過ぎたり。

遼との界論

三、北邊に成壘を増して、遼の界を侵したるが爲に、遼の

道宗興宗の子に責められて、七百里の地を失へり。

西夏の役

四、西夏と戦ひ、二たび大敗せり。かくて神宗は、在位十八

元祐の政

年の間、勤儉にして、政務に心を勞したれども、誤つて王安石を用ひたるが爲に、一事も意の如くなること能はず。

神宗崩じ、子哲宗年少く、祖母なる宣仁太后政を聽き、安

石の黨を黜け、司馬光等を用ひて、神宗の弊政を改めたれ

ば、國民其徳を頌して、女中の堯舜と云へり。太后崩じて、哲

「元祐の姦黨」

宗復安石の餘黨を用ひ、徽宗哲宗の弟の世には、安石の黨なる

蔡京、政を執り、司馬光等數十人を姦黨と名づけ、姦黨の碑

を州縣に立て、神宗の「功臣」の像を顯謨閣に畫き、王安石を

紹述の政

孔子の廟に配享し、又神宗の政を紹述すと稱して、聚斂を

務め、府庫を盈たし、徽宗に奢侈を勸めて、盛に土木を興し、

徽宗又道教を好み、自ら教主道君と稱し、道士二萬人を養

道教の崇信

ひ、朝政の紊亂、國民の怨苦極まれり。

第十七章 遼金の廢興。

遼の太祖の創業

契丹の國は、潢河今の内蒙古の錫刺木倫の邊に在り、本八部に分れたりしが、耶律阿保機、八部を併せて一とし、又室韋女真諸部を降し、突厥の故地を取り、梁帝友貞の時、醍醐天皇延喜十六年西紀九年自立して天皇王と稱し、又西は回紇を降し、東は渤海を滅ぼせり。之を遼の太祖と云ふ。

太宗の南略

太祖の子太宗は、石敬瑭を助けて支那の帝とし、その報として燕雲十六州と歳幣とを得たりしが、晉帝重貴叛けるに由り、南征して重貴を擒にし、中原を定め、國號を建て、遼と云へり。然るに支那の人民は、遼人の剽掠を怒り、四方に亂起りたれば、太宗は、支那を保つこと能はずして去れり。

聖宗

景宗聖宗の世、名將耶律休哥は、屢宋の軍を敗り、又聖宗の母承天太后は、英明にして軍政をも習ひ知り、澶州の役

高麗と遼と

には、親ら兵車に御して戰を督し、遂に城下の盟をなして還れり。

聖宗の親征

高麗の太祖王建は、遼の太祖即位の後二年に即位し、五傳して成宗に至り、遼の聖宗に降り、その封册を受け、鴨綠江東の地を賜はれり。その後大臣康兆、穆宗を弑して顯宗を立てたれば、聖宗親ら征し、康兆を誅して還り、江東六州を還せと命じたるに、顯宗從はず、これより遼軍屢出でたるが、茶陀二河平安道龜城府の戰に、名將姜邯贊に撃ち破られたり。されども顯宗は、大國の久しく抗し難きを知り、降を請ひて臣と稱せり。

遼の末世

道宗の時、羣邪競ひ進み、朝政已に紊れ、其孫天祚帝、闇弱にして武備頽れたる折しも、東方より大敵顯れたり。

女真

女真是女直とも云ひ、即ち黒水靺鞨にして、唐の末は、渤海

金の太祖

海に屬し、後遼に屬せしが、遼衰へ、完顔部の長阿骨打、兵を起して、遼の軍を破り、大金皇帝と稱す。これ金の太祖なり。
鳥羽天皇永久三年、西紀一一一五年、 ついで天祚帝の率ひたる七十萬と號する大軍を混同江今の松阿里江に敗り、數年の間に遼の四京を取れり。

宋金の盟約

宋の徽宗は、金國興れりと聞き、遼を夾み撃たんと欲し、使を遣して好を通じ、太祖と謀つて、金は中京を取り、宋は燕雲を取り、遼に遣れる丈の歳幣を金に與へんことを約せり。然るに金は中京西京を取れる間に、宋は燕を撃ちたれども克たず、軍潰えて還り、使を遣して太祖に請ひ、金の兵力を以て取らしめれば、前約は效を失ひ、歳幣四十萬の外に代税錢百萬緡と糧二十萬石とを與ふることを約して、僅に燕京と六州とを金より受けたり。

遼亡ぶ

太祖崩じ、弟太宗立ち、天祚帝は、金の兵に獲られ、遼は國を建つること九世二百十年にして亡びぬ。崇徳天皇天治二年、西紀一一二五年、 遼已に亡び、高麗は、遼に事ふる禮を以て金に事へ、金の世を終ふるまで侵伐を被らざれども、此頃より武臣政を執り、王室衰へたり。

高麗衰ふ

第十八章 金宋の交渉

靖康の前役

宋は、金より燕を受けたる後、金の叛將叛民を納れたれば、金の太宗、姪宗望族宗翰をして宋を伐たしめ、直に汴京に逼る。徽宗急に勤王の兵を徵し、位を避けて、子欽宗を立て、欽宗は連に使を遣して和を請ひ、靖康元年、崇徳天皇大治元年、西紀一一二六年、 和議成り、河北三鎮中山太原河間の地を割き、金帝を伯父と尊び、犒師の金銀を與へて、師を罷めたり。然るに宋人は、三鎮の地を渡さざるに由り、金の二帥復南征し、靖康二年、

靖康の後役

宋の南渡

祈請使

和議の一

金の違約

徽欽二帝以下宗戚三千餘人を執へて還れり。
 欽宗の弟高宗、南京今の河南 歸德府に即位し、敵を避けて杭州に往き、河南陝西は皆金に取られ、杭州を臨安府と改めて都とせり。是時宋には、李綱、宗澤、岳飛、韓世忠など云ふ忠義の臣あれども、高宗怯懦にして、任用すること能はず、屢人を募り、金に使せしめ、師を緩め、二帝を還されん事を願へども、容易に許されざりしが、金の熙宗立ち、宗磐政を執り、宋と和せんと欲したれば、高宗即ち秦檜に委ねて、その事に當らしめ、河南陝西を返し與へられ、又徽宗は已に死したれば、その梓宮死骸を斂めたる棺槨と高宗の母章太后とを送り還すことを許されたり。然るに金の宗磐等は、罪を得て誅せられ、朝議忽ち變じ、宗弼の意見用ひられて、河南陝西を取り戻すことに決し、兵端復開けたるに、高宗は猶和議を

和議の二

秦檜の擅權

和約の改正

金の世宗

望み、諸將を召し還し、秦檜遂に忠勇無雙なる岳飛を殺して、金と和し、東は淮水、西は大散關今の陝西鳳翔府 寶雞縣の西南を以て兩國の界とし、毎年の貢は銀絹各二十五萬とし、高宗は金の冊封を受け、梓宮と章太后とを還されたり。近衛天皇 康治元年 西紀二一四年これより秦檜は權を擅にして、異議の人を貶竄し、金國に奉事して、一時の安を偷めり。
 金帝亮は、熙宗を弑して立てる淫虐驕慢の君なり。舊國の僻陋なるを嫌ひ、燕京に遷り、大兵を興して、宋を滅ぼさんとし、軍中にて弑せられ、世宗位に即いて、師を罷めたり。此時宋の孝宗新に立ち、金の内亂に乗じて、恢復を圖りたれども、克たず、使を遣して和を議し、始めて君臣の禮を改めて、叔姪の國となり、歳幣も稍減じたり。二條天皇 永萬元年 西紀一一六五年世宗は、金の賢主にして、小堯舜と稱せられ、善政美事の多

き中にも、女直の舊風を愛して、漢俗に倣ふを禁じたるは、魏の孝文帝と反對にして、國の強盛なることも、孝文の時に勝れり。

一 宋の叛盟の

宋の寧宗の時、韓侂胄權を專にし、大儒朱熹を逐ひ、賢相趙汝愚を竄して、暴威を振ひ、金の政亂れたるを聞き、盟に叛いて金を伐ち、大敗せり。侂胄は史彌遠に殺され、寧宗その首を金に獻じ、歲幣を増して、復和を結べり。土御門天皇 承元二年、西紀一二年其後金は蒙古に困められたれば、宋人は歲幣を遣らずして、和約復破れたり。かくて金の亡びんとする時、宋の理宗は、復讎の機到れりとして、兵を遣して、蒙古を助け、ついで蒙古との約束を破り、中原を取らんとして、蒙古の怒に觸れたるは、徽宗の遼に背き金を助けて、又金に背きたる失計と一轍に出でたり。

二 宋の叛盟の

宋の理宗の失計

第十九章 宋代の儒學文藝

宋の理學道

漢唐の儒者は、諸經の訓詁を取り調ぶる事を務めたりしが、宋儒は、字句にのみ拘らずして、深奥なる道理を研究し、之を性理の學とも、格物窮理の學とも、又理學とも、道學とも云へり。性理とは、人性と天理とを云ふ。格物窮理は、萬物の理を窮むると云ふ事なれども、今の物理學には非ず、哲學心理學の如き無形の理學なり。宋の儒學の盛になれるは、仁宗の時にして、范仲淹、胡瑗、歐陽修、周敦頤など先づ出てたり。范仲淹は、文武の才あり、賢相として名高く、胡瑗は、經學を實用に施し、教育に功あり、歐陽修は、文章を以て顯れ、専ら理學の祖と立てらるゝは、周敦頤なり。左に列したるは、皆理學の大家として推さるゝ人々なり。

宋初の名儒

理學の大家

姓名

字

號

おもなる著書

北宋の文藝

宋の文藝は、歐陽修に至り大に興り、文には、歐蘇曾王、詩には、歐梅蘇黃あり、皆仁宗より徽宗までの間の人なり。

詩文の大家

姓名	字	號	詩文集の名	最も長じたる藝
歐陽修	永叔	廬陵 <small>生地なる江南西路吉州治(今の吉安府治)の縣名</small>	文忠集	文詩
梅堯臣	聖俞	宛陵 <small>生地なる江南寧國府治宣城縣の古名</small>	宛陵集	詩
蘇洵	明允	老泉 <small>生地なる蜀の眉州の地名</small>	嘉祐集	文
蘇軾 <small>洵の長子</small>	子瞻	東坡居士 <small>湖北黃州に貶せられたる時住める地の名に依れる號</small>	東坡全集	文詩
蘇轍 <small>洵の次子</small>	子由	穎濱遺老 <small>許州に退きたる時自ら稱したる號</small>	樂城集	文
曾鞏	子固	南豐 <small>生地なる江西建昌府の縣の名</small>	元豐類藁	文
王安石	介甫	臨川 <small>生地なる江西撫州治の縣の名</small>	臨川集	文
黃庭堅	魯直	山谷道人 <small>山谷寺の林泉を愛して自ら稱したる號</small>	山谷集	詩

三蘇

南宋の名家

蘇洵父子は、三人ともに名高き文人にて、世に三蘇と云ひ、洵を老蘇、軾を大蘇、轍を小蘇と云ふ。梅は歐の詩友、曾は歐の門人、黃は大蘇の門人なり。南渡の後は、理學盛に行はれて、詩文稍衰へたれども、猶詩人には、楊萬里誠齋、范成大湖陸游翁等の名家あり。宋の末に節義を以て顯はれたる文天祥文山、謝枋得壘山は、皆文に巧みなりき。

第二十章 宋代の西域諸國

大食の大諸侯

サマン家

唐の末、大食の國亂れてより、強大なる諸侯代るく起り、皆摩訶末教を奉じ、哈利發の冊封を受け、名のみは臣屬と稱すれども、其實は獨立國に異ならずして、哈利發は虚位を擁するのみとなれり。それらの諸侯の内、宋代の前に起れるは、サマン家とデーレミ家となり。

サマン家は、中亞細亞の二大河なるシル河、アム河の地と

デーレミ家

呼羅珊^{カフリス}とを領し、スルタン(君王)と稱し、後に回紇の別部なる西回紇のイレク汗に滅ぼさる。デーレミ家は、世々エミールアルオムラ(宗教の擁護者)と稱し、波斯の大半を領せしが、後に南北兩家に分れ、南家は報達^{バウダ}に居り、エミールの職を継げり。次に起れるは、ガズニ家と稱するトルコ種なり。西紀一〇〇一年、即ち第十一世紀の第一年、一條天皇長保三年ガズニのスルタンマームード、印度に攻め入り、ラーヂプト族の諸侯を破り、其後三年、西回紇のイレク汗を撃ち拂つて、河間の地を取り、後又デーレミ家の北家を滅ぼせり。

カズニ家

セルズク家

セルズク家も、トルコ種にして、河間の地より起り、トグル、ペグに至り、ガズニ家の大軍を破り、又デーレミ家の南家を滅ぼして、エミールとなり、その姪アルプアルスランは、西紀一〇七一年後三條天皇延久三年の大戦に、東羅馬帝ローマヌス第四を擒に

ゴール家

貨勒自彌家

西遼

せり。

ゴール家は、ガズニの南より起り、ガズニ家を滅ぼせり。貨勒自彌家も、トルコ種にして、アラル湖の南今の機窪國の地より起れり。遼の亡びたる時、その皇族なる耶律大石、衆を率ゐて西に走り、回紇を降し、柯耳魯^{カハル}を降し、垂河今の珠河の上なるベラサグンに都し、カラキタイの闊兒汗^{カハル}と稱し、セルズク家のスルタンサンギルの大軍を敗り、貨勒自彌を降し、中亞細亞の大國となれり。その國を支那にては、西遼と云ふ。其後貨勒自彌の君タキシ、セルズク家を滅ぼし、其子アラモ、チンムハムトは、波斯の諸州を併せ、西回紇を滅ぼし、又元の太祖に滅ぼされたる乃蠻國^{ノマン}の亡人曲出律^{クシュ}と謀を合せて、西遼を攻め、曲出律は遼帝の位を奪ひ、順德天皇建曆元年、元の太祖六年、西紀一二一年ムハムトは又ゴール家を滅ぼせり。建保三年、元の太祖十一年、西紀一二一五年

西遼の末路

第三篇 近古

第一章 元の太祖の勃興西征

室章 蒙古は、室章諸部の一にして、今の斡難今の怯緑連兩河の源なる不兒罕山今の肯特山の邊に遊牧し、世々遼金に隸屬せしが、哈不勒に至り、始めて汗と稱せり。哈不勒の孫也速該、塔塔兒人に殺され、部衆皆叛き、長子鐵木眞、屢隣部に困められ、親友なる札只刺部長札木哈、父の友なる克烈部長玉汗の力にたよりしに、諸族多く札木哈を棄て、鐵木眞に歸し、推して蒙古部長とし、成吉思汗と號したり。其後塔塔兒等十一部、札木哈を奉じて、來り攻めたるを、成吉思汗迎へて撃ち散らし、後又玉汗も、來り襲ひたるを、哈蘭只の野に撃ち取り、克烈部を滅ぼし、又抗海、按臺の地を有てる乃蠻

哈蘭只の戰

成吉思汗

哈不勒汗

斡難河源の即位

削平の業

曲出律汗

國を滅ぼし、薛靈哥河の邊に住める蔑兒乞部を滅ぼし、漠北の地悉く定まりたれば、諸部の君長、斡難河の源に會して、成吉思汗を大汗と戴けり。これ元の太祖聖武皇帝なり。是年は、土御門天皇の建永元年西紀一〇六一年にして、太祖四五歳、元人は是年を以て太祖の元年とす。

太祖、これより北は斡亦刺部、乞兒吉思部を平げ、西は乃蠻の王子曲出律を逐ひ、畏兀兒部、柯耳魯部を降し、南は夏國を降し、又金の大軍を野狐嶺今直隸宣化府張家口の外に破り、六年、金の宣宗の和を請へるに由り、一時は師を班したるが、宣宗汴京に遷れりと聞き、その已を疑へるを怒り、兵を遣して燕京を取り、太祖十年遼西、遼東、河北、陝西の地を取れり。乃蠻の曲出律、遁げて西遼に依り、貸勒彌と謀を合せ、西遼を奪ひ、暴威を振ひたれば、蒙古の將哲別は、曲出律

太祖の西征

を平げて、西遼の地を定めたり。太祖、貨勒自彌と商を通ぜんと欲し、畏兀兒の商民百人を遣したるに、幹脱刺兒の城主之を殺し、次の使は、スルタンムハムトに殺されたれば、太祖十四年、順徳天皇承久元年、西紀一二一九年、大軍西征し、四皇子朮赤、察合台、窩闊台、拖雷等、分れて諸城を攻め、四年ならざるに貨勒自彌の全土を平げ、ムハムトは、裏海の小島に遁げ入つて死し、其子札刺勒丁は、太祖に追はれて、信度河を渡り、印度に逃れたり。

哲別速不台の遠征

此時、哲別速不台の二將は、命を受けて、波斯の西北の諸國を蹂躪し、裏海の西を繞り、歐邏巴に入り、阿速、欽察等の諸部を破り、幹羅思西亞即ち露の諸侯、聯合して來り攻めたるを、カルカ河アゾフ海に入る小河に撃ち破り、裏海の北より東に還り、大軍に會せり。かくて大軍の蒙古に歸りたるは、太祖二十

子弟の分封

年後堀河天皇嘉祿元年、西紀一二二五年の春なり。

太祖既に西域を定めて、長子朮赤に欽察の地を與へ、次子察合台に西遼の地を與へ、第三子窩闊台に乃蠻の地を與へ、第四子拖雷に蒙古の地を與へ、蒙古の東南より女直の地までは、第四人に分け與へ、支那の領地と阿母河の西南の地とは、地方官に支配せしめたり。太祖西域より歸り、西夏を撃ち滅ぼして、金の地に入り、疾を得て六盤山の南にて崩じ、羣臣喪を奉じて還り、怯緑連河の源に葬れり。これ太祖の二十二年、後堀河天皇安貞元年、西紀一二二七年にして、年六十六歳なりき。

太祖崩す

蒙古の大會

第二章。元の太宗憲宗の南征、拔都旭烈兀の西征。蒙古の俗、汗を立て、師を興す等の大事は、必ずクリルタイと稱する大會にて議定せり。故に太祖崩じたる時、諸王百

太宗の即位

金亡ぶ

太宗の大征伐

拔都の西征

官、怯緑連河の源にてクリルタイを開き、窩闊台を奉じて大汗の位に即かしめたり。これ元の太宗なり。太祖崩じて後二年、西紀一二二九年。太宗の二年、金を伐ち五年、汴京を取り、六年、哀宗死して金亡びたり。金は太祖より哀宗まで九帝百二十年なり。七年、太宗は、斡兒寒河今のオホホソノ河の西なる和林即ちカラムカに都を建て大會を開いて、更に大なる征伐を議し、皇子闊端、曲出等は、道を分けて宋を撃ち、唐古は、高麗を征し、朮赤の子拔都等は、歐羅巴の諸國を征し、他の一軍は、北印度に攻め入りたり。

拔都の西征は、アレクサンドルの東征にも劣らざる壯舉にして、老將速不台これを輔け、拔都の兄斡魯朶、弟昔班、察合台の子拜達兒、太宗の子貴由、拖雷の子蒙哥等従へり。太宗八年、ブルガル部を平げ、九年、欽察の諸部を平げ、斡羅思の

ワルスタットの戦

金帳即ち欽察汗國

白帳青帳

諸城を破り、十二年キエフに克ち、軍を分けて西南に進み、拜達兒の一軍は、波蘭に入り、十三年、シレジャを侵し、波蘭人獨逸人聯合の兵をワルスタットトリグニツの東南に破り、東南に向ひ、拔都の軍に會す。拔都、速不台等は、馬札兒今のウラルの南に入り、敵軍をサヨ河に襲ひ破り、ヘス城を降し、別軍は、オーストリアに入り、イタリヤのエネチヤに破りたり。

この年、太宗の凶報軍中に達し、明年、全軍東に還り、拔都は留つて諸屬國を鎮撫し、後、ブルガ河の下流なるサライに斡耳朶即ち帳殿を建て、金、斡耳朶と名づけ、南北斡羅思の諸侯を統治し、歐亞二洲に跨れる大國となれり。之を金、斡耳朶即ち金帳の國と云ひ、又、欽察の地に居るが故に、欽察汗國とも云ふ。又、拔都の兄、斡魯朶は、アラル海の北に居り、白帳と號し、弟、昔班は、ウラル河の東に居り、青帳と號し、皆金

定宗憲宗の即位

帳の汗に隸屬せり。太宗崩じて後、皇后脫列哥那政を攝すること五年にして、大會始めて開け、太宗の長子定宗貴由選ばれて大汗となれり。定宗崩じて後、大會は、拔都の議を納れて、憲宗蒙哥を立てたれば、太祖の皇統は、拖雷の後に歸し、後深草天皇 建長三年西 紀一二年、太宗の子孫悦ばず、叛を謀れる者あり、黨與多く誅せられたり。

憲宗の大征伐

憲宗の二年、内難既^レ愈^ク、大會を開いて大征伐を議定し、皇弟忽必烈は、大理國を征し、皇弟旭烈兀は、波斯を征し、諸王也古太祖姪は、高麗を征し、他の一軍は、北印度を征せり。波斯の地は、太祖の還りし後、札刺勒丁、舊業を恢復せんとして、蒙古の大將に滅ぼされ、太宗三年 諸小國は、次第に服屬したれども、報達ハルハの哈利發のみは従はず、又エルブルス山の

札刺勒丁の敗滅

旭烈兀の西征

地には、摩訶末教の一派にて、暗殺を以て教規とする木刺奚の國あり。旭烈兀は、先づ木刺奚を誅滅し、憲宗六年 次に報達を圍み、阿拔斯朝を滅ぼし、憲宗八年 地中海の濱まで兵威を耀かし、本國の冊封を受けて、西亞細亞の主となり、タプリースに都し、伊兒汗と稱したり。これより伊兒汗の國は、朮赤の子孫の領する欽察汗國、察合台の子孫の領する察合台汗國と共に、蒙古帝國の三大藩となれり。

大理の降服

大理國は、雲南の地にして、唐の末より獨立したりしが、忽必烈、吐蕃の東境を経て、雲南に入り、大理王を降して還り、憲宗三年 元良合台を留めて、羣蠻を定め、安南を伐たしむ。安南の李氏は、陳日煚に國を奪はれたりしが、日煚其都城を蒙古に破られ、怒つて位を避け、其子陳日烜立ち、遂に蒙古に降れり。憲宗八年

安南の陳氏

憲宗の南征

世祖の即位

憲宗八年、自ら大軍を率ゐて宋を伐ち、九年、合州今の重慶府合を圍める時、疾を得て崩じたり。時に忽必烈は、鄂州を攻めしが、和林的の諸將、その弟阿里不哥を立てんとすと聞き、宋人に和を許して歸り、明年龜山天皇文應元年、西紀一二六〇年、開平今の内蒙古多倫に至りて帝位に陞り、阿里不哥も、和林的の西にて大汗と稱して、位を争へり。後四年、阿里不哥降り、忽必烈汗は、都を燕京に遷し、又後七年、國號を元と改めたり。これ元の世祖なり。

第三章 元の世祖の一統及東侵

伯顔の南征

元の世祖は、宋人の使者を拘留せるを討じ、先づ襄陽を降し、ついで丞相伯顔をして大軍を率ゐて、南伐せしむ。時に宋帝崩じ、幼主熈立ち、文天祥、張世傑等、勤王の師を起したれども、元の軍臨安に迫るに及んで、宰相陳宜中、和を唱

へて戦はず、伯顔等臨安に入り、帝熈を執へて、上都即ち開平に送れり。

宋亡ぶ

熈の兄端宗熈、逃れて福州に至り、陸秀夫、張世傑等に立てられたれども、元兵に迫られ、高州今の廣東高州府に走つて崩じ、陸秀夫等、端宗の弟昺を立て、厓山今の廣東廣州府新會縣の南に遷り、元の張弘範に攻められ、秀夫は、昺を負うて海に入り、世傑は、安南に走らんとし、溺れ、文天祥は、執へられて屈せず、大都即ち燕京に送られて後殺されたり。宋は、太祖より十八世、三百二十年、後宇多天皇弘安二年元の至元十六年、西紀一二七九年に亡びたり。

北條時宗の英斷

我邦は、唐の末に遣唐使を罷めてより、宋の世には通聘全く絶え、僧徒商人の時々往來するに過ぎざりしが、高麗は屢蒙古に攻められて屬國となりたれば、世祖は、遂に我

邦をも招かんと欲し、高麗に命じて、國書を遣りたれども、鎌倉の執權北條時宗、その文の無禮なるを怒つて答へず、龜山天皇文永五年後三年、元の使趙良弼至りたれども、太宰府より逐ひ還されたり。後又三年、文永十一年、蒙古高麗の兵二萬餘人、對馬壹岐に寇したるに、その明年は、元の使者杜世忠至りたれば、北條時宗、之を斬つて西海の邊備を嚴にせり。

文永の役

弘安の役

かくて弘安四年、至元二十八年西紀一二十八年、蒙古高麗の軍に、江南の漢軍を加へて十四萬餘人、筑紫に寇し、我が將士に禦がれて、連に利を失へる折しも、大風起つて、四千餘艘の軍艦、枯葉の如く吹き摧かれ、大將范文虎等大敗して逃げ還れり。世祖は、我邦に失敗したれども、元の武威は、これが爲に挫けたるに非ず、益、南方に向ひて、その兵力を窮めたり。宋

世祖の南略

蒙古の領地

の未だ亡びざる時、既に皇子忽哥赤を封じて雲南王とし、南方を鎮せしめ、安南には駐在官を置き、又緬國今の英領を撃ち、宋を平げたる後、猶二回の征伐ありて、遂に之を降し、海軍を發して、占城隋唐の林邑、今を撃ち破り、安南の叛を討じて、又之を降し、南海の諸國を招き、瓜哇國までも征服せり。かくて蒙古の領地は、太宗憲宗の時に、西亞細亞、東歐邏巴に廣がりたるが、世祖の時に至り、東南亞細亞の諸國諸嶋まで、その威風に靡きたり。

第四章 元代の治亂、諸汗國の盛衰

憲宗の大汗に選ばれし時、太宗の子孫皆不平なりしが、阿里不哥の亂に、太宗の孫海都、之に與し、阿里不哥降りて、海都は世祖に従はず、欽察汗忙哥帖木兒拔都の孫の助を得て、察合台汗八剌察合台の曾孫を敗り、尋て之と和し、戴かれて大

海都汗の獨立

乃顔の亂

汗となれり。至元三年、西紀一二六六年。伊兒汗阿八哈旭烈兀の子は、世祖の姪なるが故に、海都を助けざるのみならず、屢欽察汗察合台汗と戦ひ、子孫の世まで常に元朝を尊戴せり。

察八兒の降服

海都は、屢世祖の兵と戦ひ、又東方の宗王乃顔を誘ひ亂を起さしめられたれば、世祖は、自ら乃顔を征して滅ぼせり。世祖崩じて、孫成宗立ち、海都の兵力猶強かりしが、海都死して、子察八兒立ち、勢忽ち衰へ、武宗成宗の子の時、察八兒遂に元に降り、花國天皇延慶三年、西紀一三一〇年。海都の帝國は、四十五年にして亡び、その領地は、察合台汗國に并せられたり。

帝國の分裂

世祖は、支那の天子と爲り濟まして、南方に威を振ひたれども、西北の方には命令行はれず、太祖の創建せる蒙古の大帝國遂に分裂し、三汗國は、名義のみ宗藩と稱すれども、各皆獨立して、互に爭奪を事とせり。

元の文治

太祖太宗は、軍馬の間に世を送りたれども、猶耶律楚材と云ふ賢人を任用し、世祖は、儒臣を重んじ學校を興し、仁宗武宗の弟は、唐宋の制に倣ひ、科擧を設けて士を取りたれば、元の一代、學者文人には乏しからず。されども將相の重任は、蒙古人にのみ委ね、その下には、契丹人、女直人、畏兀兒人など多く朝廷に仕へ、漢人は、それらの外國人と共に下僚に働くのみなれば、その不平は絶ゆること無かりき。

漢人の不平

刺麻教の尊崇

又吐蕃は、唐の初より佛教盛に行はれしが、唐の中頃、北印度の巴特瑪繖巴幹と云ふ名僧來り、佛教の一宗派を興し、その宗旨を奉ずる高僧を刺麻と云ひ、其後刺麻の勢力次第に加はり、蒙古の興れる頃は、その威令、吐蕃の全土に行はれたり。世祖は、刺麻八思巴を尊寵して、大寶法王に封じ、帝師の號を加へ、西番吐蕃の國と支那の僧尼とを統べ

帝師八思巴

しめたり。これより歷朝の天子后妃、皆帝師の戒を受け、佛事祈禱の爲に財を費やすこと限りなく、其徒は、勢を怙んで、利を貪り、法を犯し、弊害極まれり。

世祖嘗て國庫の乏しきを患へ、交鈔と稱する紙幣を濫發したる事ありしが、其後歷朝みな理財の道に苦み、惠宗武宗に至り、大臣に政を委ね、番僧を親近して、日々に淫樂を縱にし、財政益、素れ、租稅益、重く、交鈔は全くその通用を失ひ、庶民困弊の極に達したれば、百餘年閉抑壓せられたる漢人は、その不平に堪ふる事能はずして、四方より盜賊蜂の如くに起れり。

かくて支那の大亂二十餘年の後、それらの盜賊の中より、希代の英雄明の太祖興り、先づ南方を定め、大兵を遣して元を伐たしめられたれば、後村上天皇正平廿三年、西紀一三六八年、

元の財政

元の北遷

蒙古の衰亂

伊兒汗國の盛時

二汗國の衰亂

惠宗の君臣は、大都を棄て、開平に奔れり。世祖の燕に都したるより、惠宗の北遷まで、蒙古汗の支那に君臨したること、九世百五年なり。惠宗は、後二年に崩じ、子昭宗立ち、僅に漠北の地を保ちしが、昭宗の子孫は、五人まで、其臣に殺され、蒙古の勢大に衰へ、遂に元の國號を去り、韃靼と稱したり。

元朝の東方に衰へたる頃、西藩の三汗國も皆衰へたり。旭烈兀は、東羅馬と好を修めて、埃及の سلطان ビバルスと戦ひ、その子阿八哈は、東羅馬帝の女を娶り、基督教徒を保護し、イギリス、フランス諸國とも使を通じ、國內よく治り、阿八哈の孫合贊は、制度を定め、文教を興し、蒙古諸汗中の賢君と稱せられ、合贊の弟合兒班答は、察合台汗也先不花を禦き敗つて、その河間カハルカスの地を侵掠せり。察合台汗國、これよ

欽察汗國の盛時

金帳の位争ひ

りして振はず、叛亂相繼ぎ、河間カヘンの諸酋長は、割據して自ら擅にせり。伊兒汗イールの國も、合兒班答カヘンの子アアサイドアアサイドの時に至り、貴族漸く命を拒み、アアサイド死して、後醍醐天皇建武二年、西紀一三三五年。内亂起り、呼羅珊フラスシリヤ皆叛き、伊兒汗の勢大に衰へたり。

欽察汗月即別チンサハの時、トエル侯アレクサンドルアレクサンドル命を拒みたるに由り、莫斯科侯モスクワイアン第一をして之を伐たしめ、其功に由つて、大公の位を授け、幹羅思の諸侯を統べしめたり。月即別の子札尼別チニベの時までは、欽察汗の勢力方に盛なりしが、札尼別死して、後村上天皇正平十二年、西紀一三五七年。國亂れ、篁弒相踵ぎ、拔都の裔なる金帳の血統絶え、拔都の弟脱哈帖木兒トカチムの裔なる克里姆汗クリム、喀散汗カサハ、拔都の兄幹魯朶カンロダの裔なる白帳汗の三汗、互に金帳の位を争ひ、戰亂已むこと無かりき。

第五章 明の初世

明の太祖興る

明の太祖、朱元璋は、本濠州今の安徽鳳陽府の窮民なりしが、元の末、盜賊蜂起して、郭子興と云ふ者濠州に據れる時、往て之れに従ひ、子興死したる後、其軍を併せて、紅巾の賊韓林兒韓林兒に屬し、遂に金陵今の江蘇江寧府を取つて、之に據れり。後村上天皇正平十一年、元の惠宗至正十六年、西紀一三五六年。是より太祖の兵、向ふ所に敵なく、陳友諒を敗つて、江西湖廣を定め、浙西の張士誠を擒にし、浙東の方國珍を降し、元の至正廿七年、徐達常遇春をして北伐せしめ、檄を傳へて、羣胡を逐ひ、生民を救ふの意を諭し、明年帝位に即き、國を大明と名づけ、洪武と改元し、元の大都を取つて、元帝を逐ひ出し、詔して胡俗を禁じ、支那の衣冠に復し、漢人二たび漢人の天子を戴くことを得たり。かくて諸省皆定まれる後、遂に漠南を平げ、吐蕃を平げ、元の軍を捕魚兒海即ち貝爾諾爾に敗れり。

太祖の成功

太祖の外征

太祖の文學

明の太祖、布衣より起つて帝業を成せるは、漢の高祖に似たり。唯高祖は儒生を嫌ひたるに、太祖は、少き時無學文盲なりしにも拘らず、兵馬の間に在つて學を好み、詩文を習ひ、儒士を尊用し、既に位に即て、府州縣に皆學校を興して、教育を獎勵したるは、漢高に異なり。然れども太祖は天性殘忍にして、猜忌多く、身後に至り、諸功臣の制し難からんことを慮り、丞相胡惟庸、謀反を以て誅せられたる後、功臣李善長等を惟庸の黨と名づけて、三萬餘人を誅し、猶暨き足らずして、藍玉を族誅し、その黨と名づけて誅せられたる者又一萬五千人に及べり。

太祖の殘忍

胡藍の獄

「靖難」の師

洪武卅一年、後小松天皇應永五年、西紀一三九八年太祖崩じ、皇太孫たる惠宗立ち、叔父諸王の重兵を擁するを患へ、齊泰、黃子澄の策を用ひ、周王橚を廢して庶人とし、建文元年、湘齊代岷の四藩を廢したれば、燕王棣、太祖第四子兵を擧げて反し、齊泰、黃子澄を誅するを以て名とし、その兵を號して靖難の師と云ふ。惠宗懼れて、齊黃を黜けたれども、燕の師罷まず、合戦三年にして、京師陷ち、惠宗の行くへを失へり。燕王自立して、

成祖の殘忍

明の成祖となり、建文の忠臣を殺戮し、名儒方孝孺の屈せざるを怒り、その宗族朋友門人數百人を殺せり。成祖、燕京を以て北京とし、後北京に遷り、金陵を以て南京とせり。

交趾の征服

安南の陳氏は、武臣胡季犛に國を奪はれたれば、成祖は陳氏の子孫を助くるを以て名とし、大軍を發して南伐し、永樂五年、後小松天皇應永十四年、西紀一四〇七年胡季犛父子を擒にし、陳氏の後をも立てずして、其地を取り、交趾布政司を置いて之を統べしめたり。又宦官鄭和は、水軍四萬人を率ゐて、南海の諸國に使し、金幣を賜ひ、明の威徳を示し、服せざれば、兵を以

西南洋の經略

て脅し、諸國の朝貢の使を伴ひ還れり。鄭和は、凡て七たび使を奉じ、三たび君長を擒にし、諸國その威を畏れ、かつ通商の利を貪り、占城、真臘、今の東より榜葛刺、錫崙まで卅餘國來朝せり。

韃靼の親征

此時科爾沁部の阿魯台、元帝の裔本雅失里を立て、韃靼汗とし、明の將邱福之を撃つて敗死したれば、成祖五十萬と稱する大軍を率ゐて親征し、韃靼の軍を幹難河に撃ち破り、本雅失里は遁れて瓦剌部に奔り、阿魯台は東に奔り、遂に明に降れり。瓦剌部長瑪哈木は、本雅失里を弑して、漠北に威を振ひ、明を撃たんとする噂聞えたれば、成祖復親征し、土拉河の濱にて撃ち破れり。

瓦剌の親征

第六章 帖木兒の兼并

第二の成吉思汗

元朝もその三大藩も、同じく衰亂せる時に當り、この四

帖木兒起る

國の内にて中央なる察合台國より、元の太祖にも劣らざる英雄興り、切々に摧けたる蒙古帝國の諸部を掻き集めて、二たび大蒙古國に打ち堅めたり。その英雄は、察合台大王の宰相なる哈刺沙兒諾顔の五世の孫にして、名を帖木兒と云ひ、世々察合台汗に事へて、渴石南今のシールの地を領せり。察合台汗トグラクテムール也先不花汗の子が、河間の地に攻め入りたる時、帖木兒その麾下に屬し、トグラク東に還り、其子エリアス、コーチャを留めて河間を支配せしめ、帖木兒をその宰相とせり。然るに河間の諸部、エリアスに服せずして、叛亂起りたれば、帖木兒は、エリアスを逐ひ出し、後村上天皇正平廿三年、西紀一三六五年、後五年、諸部を全く定めて、河間の主となり、撒麻耳干を都とせり。

東西南三面の征伐

これより帖木兒は、屢葱嶺を踰えて、モグリスタン蒙古國の義にて察

合台汗國の篡立者を勦討し、黑的兒火者汗カニエリアの弟を降して、その女を娶り、又欽察汗國の内亂に干涉し、白帳部より出て、威を振へるウルス汗を逐ひ、克里姆クリム部リミヤのトクタミを助けて金帳の汗位を繼がしめたり。後龜山天皇天授二年、西紀一三七六この時伊兒汗の國久しく亂れ、諸部皆分裂したれば、帖木兒先づ呼羅珊を取り、阿富汗人アフガニヤンを窘め、マザンデランを荒し、數年の間に波斯の全土を定めたり。

欽察の征服

トクタミ汗已に欽察を統べ、露西亞の叛藩を征し、莫斯科を下し、ウラヂミル、リヤザン等を焚き、勢に乗じて帖木兒の屬地を侵したれば、帖木兒怒り、二たび欽察に攻め入り、トクタミを撃ち破り、莫斯科に至り、兵を觀して還れり。

摩訶末教國たる印度

印度は、ガズニのマームード、バンギ即ち五河地方に攻め入りてより、婆羅門教佛教を以て名高かりし、神聖の地も、

デルヒの殺掠

遂に摩訶末教國のなかまに入り、トルコ人に支配せらるゝことゝなれり。ガズニ家は、ゴールのシハブウヂンに滅され、シハブ死して、奴隸王家、キルチ家、トグラク家、相踵て起り、皆デルヒ今のに都せり。奴隸王家は、屢蒙古の侵掠に遇ひ、かつ諸州の牧長の專横と温都教徒の離叛とにより、印度の争亂絶ゆる事なかりしが、トグラク家の時に至り、帖木兒の大軍、颯風の如く入り來り、デルヒを陥して、殺戮を縱にせり。後小松永六年、西紀一三九九年トグラク家は、この激しき痛手より回復するこ

オトマン帝國

と能はずして遂に衰滅し、賽夷家これに代れり。元の太祖の西征せる時、メルウの傍に住める突厥の遺族、難を避けて西に走り、小亞細亞に寓居せしが、元の成宗の時、部長オスマン、東羅馬の地を奪つて、國を立て、オトマン帝國の基を開き、スルタンバヤゼットに至り、バルカン半島の大半を

アンゴラの戦

取り、ハンガリー、ポーランド、フランス聯合の兵を敗れり。應永三年、西紀一三九六年。帖木兒、印度より歸り、又西征し、先づ埃及の兵を破つて、シリヤを取り、アンゴラの激戦に、オトマントルユの大軍を敗り、バヤゼットを擒にせり。應永九年、西紀一四〇二年。

帖木兒と明の成祖

帖木兒は、明の太祖と使聘を通じたれども、元來宗國の覆されたるを快からず思ひしに、今は西方の諸國皆屈服したれば、東征して、トルコ語の豚にして、明帝に對する惡口。を平げ、祖宗の大業を光復せんと欲し、大軍を率ゐて出發したるが、明の永樂三年、應永十二年、西紀一四〇五年。斡脫刺兒に至り、疾を得て没せり。

帖木兒朝

帖木兒は、かゝる大國を領したれども、王とも汗とも稱せず、察合台の裔孫を求めて、名ばかりの察合台汗とせり。されば帖木兒の蒙古國には、國號もなく、朝の名もなく、史家は之を帖木兒朝と云ふ。

帖木兒朝の衰亂

帖木兒死して、子孫位を争ひ、第四子沙哈魯、内亂を靖めて、中亞細亞を統べたれども、其子ウルグベグの時、國又亂れ、帖木兒の曾孫スルタン・アフサイド、青帳汗の後なる烏即別部長アブルカイル汗の助を得て、撒馬兒干に君臨したり。後園天皇享徳元年、西紀一四五二年。かくて帖木兒の打ち堅めたる蒙古國は、已にばらばらに分れ、北隣なる烏即別部は益々強くして、帖木兒朝は、遂に衰滅したるが、アフサイドの孫スルタン・パーバルは、印度に攻め入り、第三の蒙古帝國を創建せり。

第七章 明の中世。

宣徳の治

明の宣宗成祖の孫は、叔父漢王高煦の叛を平げ、又北邊を巡り、兀良哈女直の別種、今の内蒙古の東部の兵を敗り、朝廷には老成の臣多くして、國善く治まり、安南には失敗したれども、明朝の最も盛なるは、宣宗の世なり。宣宗崩じ、子英宗立ち、宦官王振

王振の擅權

權を擅にし、頻に武威を耀かさんと欲し、大兵を發して麓川雲南の西南部の蠻を撃ち破り、又兀良哈を征して功なく、只北人の怨を深くして、瓦刺の大寇を招けり。

土木の變

瓦刺の脱歡瑪哈木の子は、宣宗の時、鞑靼の阿魯台を襲ひ殺し、諸部を併せ、英宗の世、脱歡死し、其子也先トホ太師、勇略あり、正統十四年、後花園天皇寶徳元年西紀一四四九年、大舉して明を侵せり。英宗王振の勸に従ひ、五十萬の兵を率ゐて親征し、土木堡直隸懷來縣の西にて也先に襲はれ、軍潰え、英宗擒にせられて瓦刺の營に至れり。孫太后、代宗英宗の弟を立て、敵を禦ぎたれば、也先も空質を擁して益なきを悟り、明年、明と和して、英宗を送り還せり。

成化弘治正徳の朝

代宗疾篤きに及んで、英宗之を廢して位に復れり。英宗の次に、憲宗、孝宗、武宗、皆父子相繼げり。成化憲宗、弘治孝宗、四十

大禮の議

一年の間は、宣徳宣宗に次いで隆盛なる世にして、殊に孝宗は、恭儉にして政を勤め、明代の賢君なり。武宗は、狂暴にして羣小を親み、朝政紊れ、盜賊屢起れり。

廷臣の哭爭

武宗崩じて子なく、皇太后孝宗の后、孝宗の弟なる興の獻王の子厚熹を迎へ立てたり。之を世宗と云ふ。世宗、獻王を追崇する禮を議せしめたるに、禮官等、世宗をして伯父、孝宗を父とし、父獻王を叔父とせしめんとしたれば、世宗怒つて従はず、三年に涉れる朝議の末に、孝宗を皇考とし、獻王を本生皇考、獻皇帝と稱することゝなれり。然るに張璁、桂萼等は、孝宗を皇伯考とし、獻帝を皇考として、本生の字を去らんと請うて、世宗の意に叶ひたれば、廷臣二百餘人、宮門に伏し、號哭して争ひ、皆獄に下され、杖せられて死せる者十六人ありき。張璁、桂萼は、固より佞臣なれども、この争

蒙古の達延汗

は、本禮官等の誤より起れり。世宗は、孝宗の養子にも非ざるに、生父を叔父と稱せんとするは、古より例なき事なり。瓦刺の也先は、自ら可汗と稱したりしが、その大臣に殺されて、國忽ち衰へ、蒙古復興れり。成化中、元帝の裔達延汗立ち、沙漠の南北を定め、正徳武宗の年號中、河套陝西の邊外、北河の南の地を取り、第三子巴爾蘇博羅特を右翼の長として、河套に居らしめたり。これ今の鄂爾多斯部長の祖なり。達延汗は、在位七十四年にして死し、曾孫達賚遜宣府今直隸宣化府の北に徙り、世々汗位を嗣ぎ、その部落を察哈爾と云ふ。

察哈爾部

阿爾坦汗

正徳以來、蒙古屢明を侵し、世宗の時、巴爾蘇の次子阿爾坦汗の勢最も張り、陝西山西頻に侵擾せられ、嘉靖廿九年、後奈良天皇天文十九年、西紀一五五〇年阿爾坦汗北京を侵したるに、明の將士戰ふ者なく、蒙古の兵掠奪を縱にして徐に去れり。阿爾坦

内外蒙古諸部

汗は、三十餘年の間、明人を困めたる後、衛拉特即ち瓦刺を降し、青海を定め、刺麻を招いて、其教を崇奉し、遂に殺戮を厭ひ、明と好を通ぜり。その子孫は東に徙り、今の土默特右翼の祖となれり。達延汗の世に在りし時、諸子皆南に徙り、内蒙古九部の祖となりしが、只季子格埒森札のみは、故地に留まり、今の外蒙古四大部の汗王の祖となれり。

第八章 安南の叛服、沿海の寇盜

安南黎氏の創業

明の成祖、安南を征服して、一時は明の州縣として支配したれども、陳氏の遺衆復起り、明人之を撃ち滅ぼしたるに、清華の人黎利、兵を起して、屢明軍と戦ひ、宣徳二年、稱光應永卅四年、西紀一四二七年明の將王通等、黎利と和を講じ、交趾を棄てて還れり。明年、黎利、大越皇帝と稱し、これより安南復獨立し、黎氏世々明の冊封を受けて、安南國王となり、國內に於

莫氏の篡立

ては、すべて天子の制を用ふ。

數世の後、武臣莫登庸、征伐の功を以て政權を得、遂に二君を弑して其位を奪へり。後奈良天皇大永七年、明の嘉靖六年、西紀一五二七年。後六

年、黎朝の舊臣阮淦、その婿鄭檢と共に、黎氏の後を奉じて

清華に據り、莫氏篡弑の狀を明に訴へたれば、明の世宗、初

世宗の南征

は莫氏を誅滅せんと欲して師を興したれども、嘉靖十九

年、天文九年、西紀一五四〇年。莫登庸、軍門に降るに及んで、登庸に安南

都統使の職を授けて、その世襲を許せり。

鄭氏の竊業

莫氏僭竊すること六十餘年、屢黎氏と戦ひしが、鄭檢の

子鄭松、莫茂治登庸の玄孫を撃ち滅ぼして、安南を威制し、黎氏

は帝號を稱すれども、實權なく、その關係は、恰も我が足利

將軍の、京都に居て、國政を專にせるが如し。

元末明初の倭寇

南北朝の亂起れる頃、我が西南の、浮浪の徒は、支那高麗

明の備倭衛所

の海岸を侵掠し、明の初に至り、方國珍、張士誠の餘黨、我が

亂民を誘ひ、海上に出没し、山東、浙江、福建の諸省、歳として

害を蒙らざることなし。明の太祖は、倭寇に備へんが爲に

沿海の地に、あまたの衛所を設けたりしが、南北朝一統し

足利氏の外交

て後、征夷大將軍足利義滿、通商の利を貪り、日本國王と稱

して、明の成祖に臣事し、かつ屢海賊を捕へて誅したれば、

明の邊患、一時は稍減じたることありき。

海賊の跳梁

足利氏既に衰へ、海賊の跳梁益甚しく、明の海濱、富饒の

地は、恰も飢鷹の餌食となり、明の奸民、大盜も、倭服を着て、

多く之に加はれり。中にも、徽州の汪直は、肥前の平戸に寓

海賊を導く汪直

居して、屢海賊を導きしが、嘉靖卅二年、天文廿二年、西紀一五五三年。賊船

數百艘、海を蔽うて至り、江浙の地方を蹂躪し、三年の間、縱

横侵掠し、無人の地を往くが如し。其後汪直は、總督胡宗憲

倭寇の消滅

に誘ひ殺され、福建の興化府を陥したる倭寇は、俞大猷戚繼光に破られ、それより劇寇始めて絶えたり。

北虜南倭

倭寇は、盡く日本人なるには非ず、明の奸民その半に居り、かつ烏合の兵にして、豪族大姓の統率するにも非ざれども、明人これを畏るゝこと虎の如く、蒙古と並べ稱して北虜南倭と云へり。

第九章 明の末世。

高麗の末路

高麗は元の徴發に困められ、財政紊れて、國力疲弊したる上に、倭寇猖獗にして、衰弱極まりしが、其將李成桂は、防禦の功に由て、威名漸く高く、我が元中九年、南北講和の年、遂に高麗の末王を廢して、國號を朝鮮と改め、明の太祖の冊封を受け、都を漢陽に徙せり。これ朝鮮の太祖康獻王なり。太祖より數世の間は、國內善く治まり、程朱の學行はれ

朝鮮の太祖

朝鮮の初世

て、文化の盛なるは、新羅高麗の二代に勝りしが、其後倭寇の爲に州縣彫弊し、宣祖昭敬王太祖の八世の孫の時に至り、我が豊臣太閤の侵伐に遭へり。

明の疲弊

明の世宗の世は、南倭北虜の爲に、國力疲弊し、穆宗の時、倭寇は熄み、淹答即ち蒙古の阿爾坦汗は、明の冊封を受けたれども、

滿洲興る

神宗の萬曆十一年正親町天皇天正十一年西紀一五八三年には、將來明朝を覆すべき滿洲の酋長は、赫圖阿拉今の興京より勃興せり。然れども、

豊臣氏と明朝

も明の君臣は、未だ滿洲の畏るべきを知らず、晏然として意とせざりしが、豊臣氏の軍、朝鮮に入り、宣祖都城を棄て、走り、頻に急を告ぐるに及んで、明人は、大に驚き、朝鮮を援けて我を禦がんと決心せり。

平壤碧蹄館の戦

かくて、後陽成天皇文祿元年萬曆廿年西紀一五九二年七月、明の將祖承訓は、小西行長と平壤に戦つて敗走し、二年正月、李如

奇怪なる和議

松等、行長を敗りたれども、小早川隆景に碧蹄館にて破られたり。此時明の沈惟敬と行長等との間に奇怪なる和議起り、神宗は惟敬に欺かれて、太閤降服すと思ひ、太閤は行長等に欺かれて、明より和を願へりと思ひ、我が諸將は都城を棄て、退き、明も其兵を減じ、慶長元年萬曆廿四年、西紀一五九六年八月、彌明の使者來り、和議成らんとしたるが、朝鮮の王子の來謝せざる爲に、太閤怒り、明年、大軍二たび、海を渡り、明朝鮮の軍を撃ち敗れり。その明年、太閤薨じ、諸將、遺命に従ひ兵を收めて還れり。

再度の朝鮮征伐

東林書院の再興

神宗の時、顧憲成と云へる名儒、神宗の意に忤ひ、籍を削られて無錫江蘇常州府の屬縣に歸り、宋の楊時の講學したる東林書院を再興して、同志の高攀龍等と共に講學したれば、四方の學者寄り集まり、往々時政を議論し、人物を批評し、朝

士も之を慕ひ遙に應和し、遂に氣節を負んで政府と相抗するに至れり。

鑛税の害

朝鮮の役より後、國用大に匱しく、頻に鑛山を開き、鹽茶船舶等の税を増徴し、宦官をして之を領せしめ、鑛監、稅監各省に遍く、勢に乗して、良民を陵虐し、慘毒を極めたり。之を鑛税の害と云ふ。神宗崩じ、光宗遺詔を以て鑛税を罷めたれども、害毒は已に全國に及べり。熹宗の時、東林の名士多く朝に入り、一時は勢を得たりしが、宦者魏忠賢、政柄を竊むに及んで、東林の黨に斥けられたる者、争うて之に阿附し、正士を排撃して、殺戮を肆にし、國內の講學書院を毀ち、各省みな忠賢の生祠を建てたり。

魏忠賢の驕暴

熹宗庸闇

此時國民の疲弊は、已にその極に達し、滿洲の勢は益盛にして、邊境に逼り、明の覆滅は旦夕に迫れるに、熹宗庸闇

大賊李自成

安宗と史可法

紹宗と黃道周

永曆帝

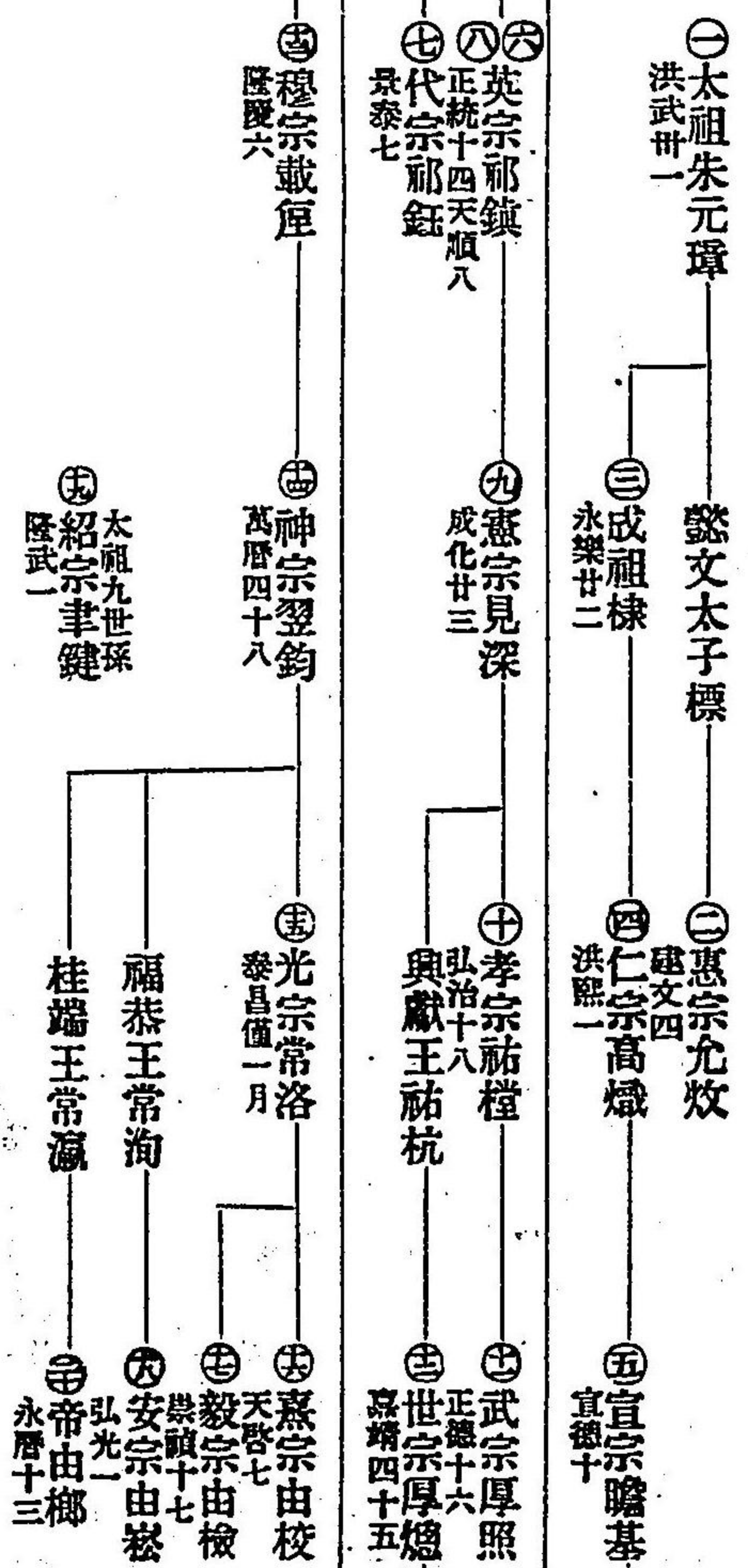
にして、姦臣の狂暴を縦にし、國家の危急なるを知らず、熹宗崩じて、弟毅宗立ち、魏忠賢を誅したれども、民心既に離れ、陝西より李自成と云ふ大賊起り、十餘年の間、西南の諸省を侵擾し、崇禎十七年、後光明天皇正保元年、清の世遂に北京を陥し、毅宗自ら縊つて崩じたり。

南京の羣臣史可法等、福王由崧を立て、帝(安宗)としたれども、清軍已に李自成を敗つて河北を定め、明年、揚州を屠り、史可法こゝに死し、南京降り、安宗執へられたり。明の遺臣黃道周等、唐王聿鍵(紹宗)を立て、福建に據りしが、清軍至り、黃道周殺され、明年、紹宗は敗死し、永明王由榔立ち、兩廣に據り、清軍に逐はれて雲南に徙り、永曆十三年、後西皇萬治二年、清の順治十遂に緬甸に奔り、明年、緬人由榔を執へて、清軍に獻じたり。明は、太祖の即位より由榔の出奔ま

て、十九帝二百九十二年なり。

明帝世系

圈の中の數字は、即位の順序なり。年號の下の數字は、在位年數なり。



明帝世系

金の文藝

第十章 元明の儒學文藝

金は、夷狄より起りたれども、太祖以來漢文を奨勵したるに由り、文物の盛なるは、遼代に勝り、能文の士も多く、元

元の諸儒

好問山遺は、金末元初に當り、詩文を以て大に著れたり。元の太宗の時、趙復江漢先生、始めて程朱の學を北方に傳へ、これより姚樞、郝經、許衡、吳澄等の諸儒興れり。郝經は、宋に使用して屈せず、忠節を以て顯れ、姚樞、許衡は、皆世祖の信任を受け、殊に許衡は、元儒の大宗と稱せられ、吳澄は、朱子を宗として、陸氏の說をも雜へ、許衡に次げる名儒なり。

元の文人

吳澄の門人虞集は、文章を以て著れ、楊載、范梈、揭傒斯と共に、元の四家として、虞、楊、范、揭と稱せられ、四家に次て歐陽玄あり。揭傒斯、歐陽玄は、皆宋遼金史の撰修に力を致せり。又郭守敬の天文學に精しく、李冶の數學に深きが如きは、宋儒も及ぶ能はざる事なり。

天文學數學

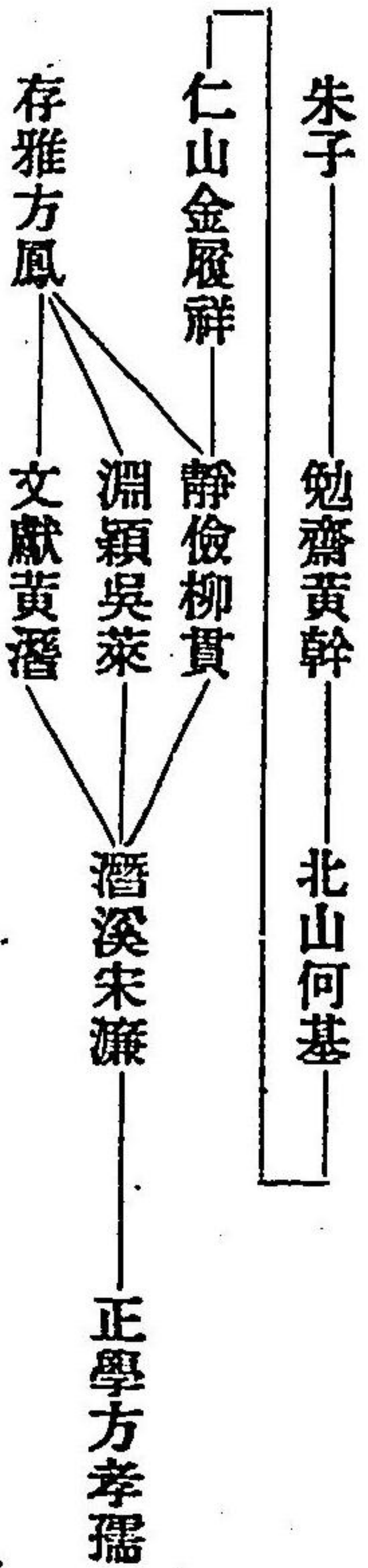
宋潛溪

明の宋濂は、程朱の學を修め、かつ詩文を善くし、太祖に事へて佐命の功臣となり、經濟文章共に一代の冠冕たり。

方正學

その弟子方孝孺は、惠宗に事へて、謀議に參し、成祖に執はれ、屈せずして死し、大節凜然たり。朱子より方孝孺に至る傳授の次序は、左の如し。方鳳人は、元の文人なり。

明初の學統



成祖の儒臣

四書五經大全

宋濂、方孝孺の門下より出でたる名儒は、大抵成祖に殺され、永樂の朝に事へたる儒臣は、大抵君を棄て、讎に降れる無恥の徒なり。成祖は、これらの儒臣に命じて、四書五經の委しき註釋を作らしめて、大全と名づけたり。さて科擧に應ずる者は、大全の文を諳記し、其說に遵つて、八股文として作例の定まれる論文を作ることゝなりたれば、程朱の學は、世に廣まりたれども、學者は、大全の奴隸となり、自

薛敬軒
胡敬齋
陳白沙
王陽明

ら經義を研究する者なく、儒學はその活氣を失へり。
されども宣德正統の間、太平打ち續きたれば、文運漸く興り、薛瑄^{軒敬}、胡居仁、陳獻章、王守仁の如き大儒顯れたり。薛瑄、胡居仁は、程朱の説を固く守りたれども、陳獻章は、禪學に近づき、王守仁は、陸九淵、陳獻章の説に本づき、道は我が心に求むべく、事物に求むべからずとて、専ら良知を致す事を主張し、姚江の學派を開けり。これより朱陸の争は、轉じて朱王の争となれり。

康齋吳與弼(崇仁)

敬齋胡居仁(餘干)

白沙陳獻章(新會)

一齋婁諒(上饒)

陽明王守仁(姚江)

王學の流行

王守仁は、聰明にして英略あり、武宗の時、寧藩の叛を平げ、世宗の時、廣西の猺^{苗蠻}一種のを平げ、武功の盛なること、儒者には珍し。弟子甚だ衆くして、その學説は一世を風靡せ

古文辭の流行

り。然るに末流の徒は、經史の研究を廢し、唯空理を談じて、躬行を修めず。之を心學の橫流と云ふ。

孝宗の時、李東陽、古文辭を善くし、李夢陽これに踵ぎ、文は必ず秦漢、詩は必ず盛唐と稱し、何景明等と相唱和し、世宗の時に至り、李攀龍、王世貞等、李何を宗とし、名甚だ高けれども、摸擬剽竊の風盛なり。唐順之、歸有光は、唐宋の大家を學びたれども、李王の流弊を矯むること能はざりき。

儒學復興の徵

東林書院起り、朱王の争は熄んで、政權の争始まり、儒學文藝皆衰へたり。かくて明末の濁亂を極めたる世の中に、篤學の士、處々に顯れたるは、甚だ珍しき事なり。その最も名高きは、孫奇逢、黃宗羲、顧炎武、李顥なり。孫、黃、李の三氏は、王學を修めて、程朱の説をも用ひ、顧氏は、朱子を尙べども、其説に泥まず、何れも博學多識にして、今代の儒學興隆の

明の遺儒

基を開けり。されども四人は、皆清朝に仕へず、明の遺民を以て終れり。

第十一章 莫臥兒帝國の興亡。

帖木兒朝の
亡滅

帖木兒朝のスルタン アフサイド歿して後、その領地分裂し、諸侯互に侵伐せるに乗じ、烏即別部のセイバニ汗アフガの子は、撒馬兒干を攻め取り、中亞細亞の主となれり。これ正に西紀千五百年後土御門天皇の事なり。此時波斯には、回教即摩訶の高僧シイスマエル、サフイー朝を興し、タフリースに都し、帖木兒の領地は、分れて烏即別部とサフイー朝とに屬せり。アフサイドの孫バーバルは、イスマエルの援を得て、一時は河間を取り返したれども、烏即別部に逐はれて、カーブルに退き、中亞細亞の地には、トフ哈兒ハ機窪キの二汗國興れり。

バーバルと
烏即別部

印度の分裂

デルヒの賽夷家、次にロヂー家は、只都の近傍を支配せる

莫臥兒帝國
の創建

のみにして、溫都教の諸侯と回教の諸王とは、四方に割據せり。バーバルは、カーブルにて兵力を養ひ、後柏原天皇大永六年西紀一五二六年、ハンキアに攻め入り、バーニットの大戰にロヂー王を撃ち破り、又ラーヂフト族をも撃ち破り、莫臥兒帝國の基を建てたり。

アグバル大
帝

バーバルの子フマーユンは、國を逐はれて、サフイー朝にたよりしが、後奈良天皇弘治二年西紀一五五六年、其子アグバルと共に印度に還り、又バーニットに戦ひ、帝業を恢復せり。アグバルは、賢明にして雄略あり、ラーヂフト族の頑強なる者を誅滅して、アム河よりガンデス河の下流までを平定し、アグラに都を建て、制度を定め、文學を奨め、従來回教諸王の土人に課したる非同教税を廢し、溫都教徒と回教徒とを同等に取り扱ひたり。

キーギハン
帝

されどもギンドヤ山脈の南に割據せる回教の諸王は従はざりしが、アクバルの孫キーギハンは、アーマドナガルを滅ぼし、ビーダルの城を取り、デカンの地方に莫臥兒朝の號令を及ぼせり。只阿富汗斯坦の領地は、波斯人に攻め取られたり。

アウランゼ
ブの南征

キーギハンの子アウランゼブは、南方に残れる回教國、ビギール、ゴルコンダの征服に掛れる間に、マラーター同盟と號する溫都教徒の叛亂起り、勢力年々に加はれり。アウランゼブ自ら大軍を率ゐて南征し、數年の後、回教の二國を滅ぼしたれども、マラーター同盟には克つこと能はず、軍に在ること廿四年にして、歿したり。東山天皇寶永四年、西紀一七〇七年、これより帝位を繼げる者、皆庸劣にして、權臣に左右せられ、諸州多く獨立し、マラーター同盟益盛なり。その頃波斯のサシー朝は、

莫臥兒朝の
衰微

已に衰へ、阿富汗人之に代り、波斯人ナーデルシャー又阿富汗人を逐て國を立て、デルヒを侵して、殺掠を肆にして去り、其後阿富汗人アーマドシャー、六たび印度を蹂躪し、デルヒ以西豊饒の地は、殆ど曠野となり、莫臥兒朝の存在は、眞に名のみとなれり。

第十二章 葡萄牙西班牙の東略、天主教の東流。

元代東西の
交通

元の定宗の時、羅馬教皇は、僧ブラノカルピニを遣し、憲宗の時、佛蘭西王も、僧ルブルキを遣し、皆カラコルムに至り、世祖の時は、エニスの商人マルコポーロ、羅馬の僧モンテユルギノなど大都今北京に至れり。マルコポーロは、世祖に仕へて、重要な職に當り、モンテユルギノは、大都に會堂を設けて、信徒を多く出せり。これより基督教師の支那に入る者少からざりしが、元亡びて、東西の交通絶え、基督教も次第に廢滅

葡萄牙人の東略

せり。

後土御門天皇明應元年西紀一四九二年、ゼノアの人コロンプス、西班牙の助を得て、西に航して、印度の東岸に達せんと欲し、亞米利加洲を發見し、其後六年、葡萄牙の人ブヌダガマ、阿非利加の喜望峯を廻り、印度に達し、侵略の端を開けり。後十二年後柏原天皇 永正六年、葡萄牙領の總督アルポケルケ、臥亞を奪つて根據地とし、遂に滿刺加を取り、マレイ羣島と交易を開き、其後葡萄牙人は、進んで支那海に入り、寧波、厦門に商館を設け、又阿瑪港、瑪港の地を借り受けて、遂に占領し、我が平戸にも商館を設け、殆ど東洋の貿易を專有せり。亞米利加の發見より後廿八年永正十七年 西紀一五二〇年、西班牙の人マゼランは、亞米利加の南端を遶り、大平洋を経て、呂宋の屬島に達し、後に西班牙人は、呂宋諸島を取り、正親町天皇 永祿八年 西紀一五六五年、菲

西班牙人の東略

明末の天主教

律賓と名づけたり。

葡萄牙人の臥亞に據りしより、基督教の舊派に屬するゼスイト會の僧徒多く來り、フランシスザヰエルは、臥亞、錫崙、滿刺加等より、遂に後奈良天皇 天文十七年 西紀一五四八年、薩摩に來り、諸國に布教し、イタリヤ人マテオリッシは、廣東に至り、姓名を利瑪竇と稱し、後諸友と北京に入り、神宗の許を受けて、天主堂を建て、天主教の舊派の弘通を務めたり。其後獨逸人湯若望（原名アダム・シール）等、其業を繼ぎ、教務の傍に、天文學、數學、砲術等を傳へたり。その頃、我邦にも基督教頗る行はれしが、島原の叛亂起つてより禁ぜられたり。支那にては、明亡びて後、湯若望は、清の世祖に寵用せられ、ベルギー人南懷仁（原名エルベエスト）は、聖祖に信任せられ、宗教の傳播と共に、西洋の學術も興りしが、世宗の、天主教を禁じてより、西學

西學東流の中絶

の東流は中絶せり。

第四篇 近世

第一章 清の開國、世祖の一統。

建州女直

後金國汗

太祖の遷都

金亡びて後、女直の諸部、世々元明に屬し、明の中世以後、海西建州野人の三衛に分れ、建州女直は、又滿洲長白山の二種に分れ、滿洲の愛新覺羅氏は、赫圖阿拉（今之）の地に居り、明の萬曆十一年、（正親町天皇）一酋長奴兒哈赤、兵を起して、先づ同族の諸部を定め、次に海西の呼倫諸部を平げ、長白山の諸部を降し、蒙古の科爾沁部を懷け、萬曆四十四年、（後水尾天皇）元和二年、自立して汗となり、國を後金と號したり。これ清の太祖なり。太祖これより明の邊境を侵し、楊錦の大軍を薩爾滸山に敗り、遂に瀋陽遼陽を取り、遷つて瀋陽に都せり。これ今の盛京なり。太祖の子太宗、金汗の

朝鮮征伐

位を嗣ぎ、從弟阿敏を遣して朝鮮を撃たしめ、國都に逼り、仁祖宣祖の孫和を請ひ、約して兄弟の國となれり。明の將孔有德、耿仲明、尚可喜、叛いて太宗に降り、滿洲の兵益強し。

察哈爾征伐

この時察哈爾の林丹汗達賚遜汗の玄孫は、蒙古の嫡宗たるを負み、諸同族を陵虐し、蒙古諸部怒り、滿洲の援を乞ひたれば、太宗自ら察哈爾を征し、林丹汗は青海に走つて死せり。太宗は、傳國の璽を得たるに由り、天聰十年、寛永十三年、明の崇禎九年、明皇帝の位に即き、國號後金を改めて大清とし、崇徳と改元せり。朝鮮復明に附きたるに由り、太宗、自ら之を征し、仁祖降を請ひ、遂に屬國となれり。

即位改號

朝鮮の再征

世祖の遷都

太宗崩じ、子世祖立ち、順治元年、後光明天皇正保元年、西紀一六四四年、明の流賊李自成、北京を犯すと聞き、叔父睿親王多爾袞をして進取を圖らしめたるに、明の將吳三桂迎へ降り、清軍を導

明清の戦

いて賊を撃ち破り、世祖北京に入り、支那の主となり、英親王阿濟格は、李自成を平げ、豫親王多鐸は、明を撃ち、二年、安宗を江中に執へ、令を下し、漢人をして、盡く辮髮して、滿洲の俗に従はしめたり。三年、貝勒博洛は、紹宗を擒にせり。十六年、後西院天皇萬治二年、西紀一六五九年、清軍、雲南に入り、明帝由榔は、緬甸に逃れ、十八年、寛文元年、吳三桂等、阿瓦城に逼り、緬人、由榔を執へて、軍前に送れり。此年、世祖崩じ、子聖祖立つ。

清帝世系

清帝世系

○内の数字は、即位の順序なり。○下の数字は、在位年数なり。

- ①太祖高皇帝奴兒哈赤 天命十一年
- ②太宗文皇帝皇太極 天聰九年崇徳八年
- ③世祖章皇帝福臨 順治十八年
- ④聖祖仁皇帝玄暉 康熙六十一年
- ⑤世宗憲皇帝胤禛 雍正十三年
- ⑥高宗純皇帝弘曆 乾隆六十年
- ⑦仁宗睿皇帝顥琰 嘉慶二十五年
- ⑧宣宗成皇帝旻寧 道光三十年
- ⑨文宗顯皇帝奕詝 咸豐十一年
- ⑩穆宗毅皇帝載淳 同治十三年
- ⑪今皇帝載活 今年明治卅七年は、光緒三十年なり。太祖即位より今年まで、二百八十九年なり。光緒萬年
- 醇親王奕譞

聖祖の英明

第二章 清の聖祖高宗の業

清の聖祖は、聰明睿知にして、古今に比類少き英主なり。即位の時は、年僅に八歳なりしが、十六歳の時、康熙八年内大臣鰲拜の擅恣を察し、之を黜けて庶政を親らし、精を勵まし治を圖り、在位六十一年、恭儉にして民を愛すること一日の如く、文徳武功竝び高く、漢唐の諸帝の上に出でたり。

聖祖の文徳

聖祖の文徳の大なる者を擧ぐれば、制度を創定し、學術を獎勵し、親ら孔子の廟に謁し、聖賢の子孫を優遇し、又國內の名儒を尊用して、あまたの大部の書を作らしめ、西洋人南懷仁等を用ひて、推歩の術器械の製造等を講究せしめたり。かつ聖祖自らも深く學を好み、曆算音律の事にも精通し、律曆淵源の撰著には、聖祖皆自ら指圖せりと云ふ。聖祖の武功の著しき者は、左の數事なり。

聖祖の武功

降將四王

一、三藩の平定。世祖の明を征せし時に、明の降將なる吳三桂、孔有徳、尙可喜、耿仲明の功多かりき。明亡びて、吳三桂は、雲南に封ぜられ、孔有徳は、戦死して後なく、尙可喜は、廣東に封ぜられ、耿仲明の子繼茂は、福建に封ぜられ、繼茂死して子精忠嗣ぎ、皆兵權を握り、三藩と云へり。聖祖、三藩の制し難きを患へ、之を撤せんとしたれば、吳三桂先づ反し、耿精忠之に應じ、尙可喜の子之信又之に應じ、西南數省皆賊に陥り、官軍奮戦し、數年にして始めて平定せり。

三藩の叛

高砂島

二、臺灣の征服。臺灣は、古より支那に屬せず、元和の頃は、我國の亡命の民、其地に據り、高砂タカサと呼びしが、寛永中、和蘭人に奪はれ、寛文元年、明の朱成功、和蘭人を逐ひ、其地を取れり。朱成功は、海賊鄭芝龍が、我が平戸に寓し、平戸人の女を娶つて生める子にして、本は鄭森と云へり。鄭芝龍は、

朱成功

國姓爺

明に歸順して、屢戦功を立てしが、紹宗の時、叛いて清に降り、鄭森は、少くして紹宗に重んぜられ、名と國姓とを賜はり、誓つて明室を恢復せんと欲し、父芝龍招けども従はず、清の世祖屢誘へども應ぜず、厦門に據つて、十餘年間清軍を攻め惱まし、が、明亡びて後、臺灣を取つて之に據り、猶永曆の年號を奉じ、明年、病んで死せり。子朱經、父の志を繼ぎ、屢清の地に攻め入りたれども、三藩の賊勢衰へてより、臺灣孤立して援なく、志を得ずして死し、子朱克瑛遂に清軍に降り、臺灣始めて清の領地となれり。

朱經

雅克薩の争

三、東北の界論。黒龍江邊なる通古斯種の諸部は、太宗の時、已に清に屬せしが、世祖の時、露西亞の將ハミロフ、雅克薩の地を取り、アルバジン城を築けり。聖祖、露西亞人に退去を諭したれども、従はざるに由り、都統彭春を遣し、アル

尼布楚の和議

バジン城を攻め落せり。その後二國の戦は歇まざりしが、聖祖は和蘭人に托して露西亞に書を遣り、國界を定めんことを求め、康熙廿八年、東山天皇元祿二年、西紀一六八九年、内大臣索額圖は、露西亞のペートル大帝の使者ゴロー井ンと、ニ布楚即ちチルチンスクの城外に會し、外興安嶺スタノヂェ山脈、額爾古納河を以て界とし、露西亞人は、アルバジンの城を毀つて退けり。

噶爾丹の并吞

四、準噶爾の親征。瓦刺の也先可汗の裔なる、準噶爾部の噶爾丹は、伊犁地方に據り、青海の蒙古部を并せ、回部諸國を降し、康熙廿七年、喀爾喀部を侵したれば、喀爾喀三汗の部衆皆東に走り、漠南に至つて清に降れり。聖祖既に三藩を平げ、臺灣を降し、露西亞と和し、國內無事なるに由り、廿九年、自ら將として噶爾丹を征し、烏蘭布通に撃ち破り、

聖祖の親征

策妄阿拉布坦

羅卜藏丹津の叛

乾隆の功業

卅五年、復親征し、昭莫多の大捷あり、噶爾丹敗走して死せり。これより外蒙古、青海、蒙古、皆清の藩屬となれり。
五、西藏の平定。噶爾丹亡びて後、其姪策妄阿拉布坦、衛拉特四部を并せ、康熙五十六年、中御門天皇享保二年、西紀一七一七年、西藏に入り、達賴刺麻の都なる拉撒を襲ひたれば、聖祖、皇子允禩等をして討ぜしめ、五十九年、衛拉特人を逐ひ拂ひ、西藏を平定し、達賴刺麻に封冊を與へたり。

聖祖崩じ、子世宗立ち、雍正元年、享保八年、西紀一七二三年、四衛拉特の一なる和碩特部の羅卜藏丹津、青海に據て叛き、明年、岳鍾琪等之を撃ち平げ、駐藏大臣を拉撒に置き、西寧辦事大臣を西寧府に置いて、西藏、青海を鎮撫せり。

世宗崩じ、子高宗立つ。高宗の在位六十年、長きことも、聖祖に同じく、治功の盛なることも、聖祖に次げり。征伐、外交

大小金川

達瓦齊と阿睦爾撒納

大小和卓の亂

緬甸

の大事を擧ぐれば、左の如し。

一、金川。大小金川は、四川の西邊の土司なり。乾隆十二年、桃園天皇延享四年、西紀一七四七年、大金川叛き、傅恆、岳鍾琪之を平げ、其後、兩金川又亂を起し、阿桂之を平げたり。

二、準噶爾。乾隆廿年、寶曆五年、西紀一七五五年、班第に命じ、和碩特部の阿睦爾撒納と共に、準噶爾の達瓦齊を征せしめ、之を擒にしたる後、阿睦爾撒納又伊犁に據つて叛き、班第を殺せり。廿二年、兆惠等、衛拉特諸部を平げ、阿睦爾撒納、露西亞の地に走つて死せり。

三、回部。回部は常に準噶爾に屬せしが、準噶爾亡びし時、回教の高僧、大小和卓と稱する兄弟亂を起し、兆惠等之を平げたり。これより天山の南北、皆清の領地となれり。

四、緬甸。緬甸の征伐には、清軍二たび失敗したれども、

暹羅の再興

緬王孟雲は、暹羅を懼れて清に降り、緬甸國王の封冊を受けたり。
五、暹羅。暹羅は、緬人に覆され、アユチヤの都を破られしが、その遺民、漢人鄭昭を推して主とし、緬人を逐て國を立て、盤谷に都し、其弟鄭華位を嗣ぎ、清の冊封を受けたり。これ今の暹羅國王の祖なり。

鄭阮二家

六、安南。安南の鄭氏は、世々國政を專にし、阮氏は順化廣南に據て、占城の地をも并せ、廣南王と稱して、鄭氏と雄を争ひ、黎氏は只虚位を保てり。乾隆卅八年、後桃園天皇安永二年、西紀一七七年、廣南の西鄙より、阮岳阮惠兄弟の賊起り、廣南を滅ぼし、後阮惠は東京黎氏の都、今の河内に入り、鄭氏を滅ぼし、清の軍は阮惠に襲はれて敗れ還り、國主黎維祁も遁げて清に奔れり。ついで阮惠は降を乞ひ、自ら清に朝し、冊封を受けたり。

西山の賊

ば、黎氏は國に歸ることを得ざりき。
七、廓爾喀。廓爾喀部は、捏波爾の西より興り、捏波爾の地を奪つて之に據り、遂に西藏を侵掠したれば、清の將福康安之を征し、その降を受けて還れり。

捏波爾國

八、臺灣。彰化彰化の林爽文反し、福康安等撃ち平げたり。

林爽文の亂

高宗の十功

高宗は、十たび武功を全りせりとて、自ら十全の記を作れり。十功とは、金川、準噶爾、廓爾喀の役皆二次、回部、緬甸、安南、臺灣の役各一次なるを云ふ。されども緬甸、安南の役は、成功とは云ひ難く、臺灣の亂は、官吏の貪縱なるに由つて起り、金川の役は、小夷の爲に徒に財を費せり。かつ乾隆の世は、内地にも臨清の清水教徒の亂、甘肅の回教徒の亂、湖南貴州の羣苗の亂などあるを觀れば、隆盛の中に已に衰替の徴を表はせり。かくて仁宗の朝に至り、楚蜀の白蓮教

衰替の徴

徒の大亂、閩粵の海賊、天里教徒が大内を襲へる禍變などあり、國家漸く多事なりき。

第三章 清の學術

清儒の考證
康熙の欽定
四經

明の遺儒顧炎武等が、元明諸儒の空論に倣はず、經史を精究して、考據の確實ならんことを務めてより、考證の學大に興り、閻若璩の如きは、最も考證に長じたり、凡て康熙時代の學者は、程朱陸王を宗とする者にて、漢魏晉唐の注疏を兼ね用ひて、一家の説を墨守せず、聖祖の御撰と稱する周易折中、詩書春秋の傳説彙纂は、宋儒の説と古注の説とを折衷したるものなり。

曆算の學

明の徐光啓が、西洋人と共に、新法算書と云ふ曆算の書を著してより、其學大に開け、康熙中、梅文鼎の曆算全書出で、支那西洋の學説を集めて精究し、聖祖又専門の名家を

漢學の復興

集めて、律曆淵源と云ふ三部曆象考成、數理精蘊、律呂精義の書を作れり。これよりして清の儒者は、多くは曆算の學を兼ね修めたり。

聖祖六十年間の獎勵誘掖は、益、學術の隆盛を致し、雍正乾隆の間、名儒甚だ多し。乾隆の學者は、漢儒を崇ぶ風盛になり、惠棟は、周易述、九經古義を作つて、漢儒の説を述べ、門人頗る多き中に、戴震は、訓詁聲韻の學に精しく、錢大昕は、地理歴史の學に長じ、戴震の弟子段玉裁は、後漢の許慎が著せる説文に委しく注し、また邵晉涵は、爾雅正義を作つて、訓詁を正し、翁方綱、孫星衍等は、古器石碑の銘文を集めて、字形の變遷を研究せり。

許鄭崇拜

宋學衰へて、漢學流行するに隨ひ、學者は字學の祖として許慎を推し、註家の宗として鄭玄を推し、許鄭を崇ぶこ

英人の印度貿易

ず、和蘭のみは許されて、長崎に至り貿易を永續せり。英人は、葡萄牙人の妨害を犯して、處々に商館を設けしが、和蘭人の抗し難きを察して、馬來羣島の地を去り、印度の商業に力を用ひ、マドラス、ボンベ、カルカッタの三所を根據地とせり。

佛蘭西の印度經略

丁抹澳地利の商會は、皆善き成績を著さずして倒れ、佛蘭西の商會は、屢起つては仆れしが、第六の商會の時、ヂウブレーと云ふ豪傑、マドラスの南なるボンヂェリーに據り、諸侯を威制して、印度を兼せんと欲し、英人と隙を生じ、戰爭數年に涉れり。その戰の中に、桃園天皇寶曆元年、西紀一七五一年英の商會の書記なりしクライヴが、アルコットの城を襲ひ取つて敵軍を防ぎたる働きは、英人の勇名を轟かせり。ヂウブレーは、マドラスの北に領地を廣めたれども、本國の朝議一

クライヴの偉功

ブラッシーの戰

定せずして、呼び戻されたれば、大望は泡の如く消え、その計略を善く繼ぎたるは、即ち敵のクライヴなり。寶曆六年、ベンガルの牧長、カルカッタを襲ひ、英人百餘人を執へて、黒害と稱する獄舎に投じて死せしめたれば、クライヴは、明年ブラッシーの野にベンガルの軍を撃ち破り、牧長を擒にし、他の牧長を擁立せり。英國の史家は、此年を以て英領印度帝國の始まりとす。

第五章 英領印度

英領印度の創建

バクサールの戰

ブラッシーの戰の後、クライヴは、東印度商會よりベンガルの總督に任せられ、次第に印度の東南諸部を削平し、又商會の兵は、バクサールの戰に莫臥兒帝を敗り、商會の勢力は、漸く中印度の諸州に及べり。後桃園天皇安永三年、西紀一七七四年ベンガル總督ワーレンヘスチングス、始めて英領印度の大總

第一マラーター戦

印度一統の策

督に任せられ、マドラス、ボンベールの二總督を統ぶる事となれり。此時第一のマラーター戦争起れり。

その後佛蘭西のナポレオン帝、窃に印度の諸侯を助けて、佛蘭西の勢力を恢復せんことを圖りたるが、大總督エルブリー侯は、兵力と陰謀とを用ひて、次第にマラーター諸國回教諸國を或は威し或は懐け、その國內に歐羅巴人を雇ふことを得ざらしめ、ナポレオンの雄圖を挫いて、英領印度の基を固めたり。その中マラーターの二國は従はざるに由り、第二のマラーター戦争起り、光格天皇享和三年、將軍レークは、ヒンドスタンに戦ひ、大佐エルズリーは、カナンに戦ひ、皆大功を立て、莫臥兒帝は、商會の保護に屬し、年金を受けて、虚位を保てり。この大佐エルズリーは、後にナポレオン帝を擒にせるエリントン公なり。

第二マラーター戦

印度の大事表

これより五十年の間印度に起れる大事は、左の如し。

日本紀年	西洋紀年	大總督の名	印度に起れる大事
光格天皇文化十一	一八一四	ヘスチングス侯	第一のチパール(廓爾喀)戦争。
同 文化十四	一八一七	同	第三即ち最後のマラーター戦争。
仁孝天皇文政七年	一八二四	ロイドアムアースト	第一のビルマ(緬甸)戦争。阿拉干等を取る。
同 天保十年	一八三九	オイクランド伯	英軍カーブルに入る。
同 天保十三	一八四二	同	阿富汗人英軍を逐にす。
同 同	同	エレンボルー伯	復讐の軍。
同 弘化二年	一八四五	ロイドハーデンデ	第一のシク戦争。
孝明天皇嘉永二年	一八四九	ダルフージー伯	第二のシク戦争。ベンガールを定む。
同 嘉永五年	一八五二	同	第二のビルマ戦争。ペグを取る。
同 安政三年	一八五六	同	オウドの王を廢して、其地を取る。
同 安政四年	一八五七	カンニング伯	印度士兵の大叛亂。莫臥兒帝その位號を失ふ。
同 安政五年	一八五八	同	東印度商會の廢止。

シク戦争

士兵の大叛

莫臥兒朝亡

東印度商會の廢止

印度女帝

印度のビルマ州

シク部は、温都教の一派にて、バンギアに國を立て、英人之を征服するに、マラーター戦争に次で最も力を勞せり。ダルフージー伯は、印度を開化に導くことを務めたれども、印度人はこれらの事を喜ばず、殊に淫虐なる諸侯を廢して其地を郡縣としたるは、最も士民の怨を招ぎ、遂に士兵の叛亂起り、中印度皆應じ、之を平ぐるに一年半を費せり。莫臥兒朝の末帝は、此亂に與したるが爲に、帝號を失へり。英國政府は、此亂に懲りて、東印度商會を罷め、印度大總督は、印度大臣の訓令を仰ぐ事となり、明治十年、西紀一八七七年、女王ギクトリヤは、印度女帝の號を取れり。十八年、西紀一八八五年、最後のビルマ戦争あり、英軍マングレーに入り、ビルマの末王戰はずして降り、ビルマは印度の一州となれり。

第六章。清英の交渉。

鴉片密賣

林則徐の果斷

鴉片戦争

英國の東印度商會の支那に輸入する商品の主要なるものは、印度に産する鴉片アヘンにして、嘉慶中、その輸入を禁じたれども、禁令行はれずして、密賣益盛になれり。道光十九年、天保十年、西紀一八三九年、兩廣の總督林則徐、廣州の英商に逼り、その貯ふる鴉片を出さしめ、二萬餘函を悉く焼き棄て、鴉片賣買の禁を嚴にし、遂に英人の通商を禁ぜり。

明年、英將フレイマー等、船艦數十艘を率ゐて、印度より來り、舟山島を占領し、廣州、厦門、寧波の諸港を封鎖し、別將ホールスエリホトは、艦隊を進めて、渤海に入り、白河口に逼りたれば、宣宗大に驚き、直隸總督琦善をして、エリホトを慰撫せしめ、林則徐の職を奪ひ、琦善を以て、欽差大臣とし、廣東に赴き、和を議せしめたり。然るに道光廿一年、天保十二年、西紀一八四一年、朝議又變じ、琦善等を黜けて、林則徐を起し、攘夷の詔を下

南京條約

して、英人を驅逐せんと欲したれども、清軍は、戦ふごとに敗れ、厦門、寧波等皆陥ちたり。

廿二年、英軍進んで吳淞を破り、鎮江を取り、江寧に逼りたれば、宣宗大に懼れ、耆英、伊里布等をして英國大使ポチンギーに會して、和議を定めしめ、英國の軍費と焼き棄てたる鴉片の價とを償はんが爲に、金二千一百万兩を出し、上海、寧波、福州、厦門、廣州の五港を開いて互市場とし、香港を英國に譲れり。

第七章 長髮賊の亂、英佛の北清侵伐。

清の文宗の世は、長髮賊の亂を以て満たされたり。賊魁洪秀全は、廣東の民にして、基督教を假りて、徒弟を誘ひ、廣西に據つて亂を起し、國號を建て、太平天國とし、自ら天王と稱せり。其徒は、皆清俗の薙髮を罷めたるが故に、清人

長髮賊

賊勢蔓延

は之を長髮賊と云ふ。咸豐元年、嘉永四年林則徐を遣して撃たしめたるに、途に病して死し、大學士賽尙阿、征伐に向ひたれども、官軍屢敗れ、二年、賊湖廣に入り、三年、江西安徽の諸城を破り、江寧に據り、江南數省皆蹂躪せられ、別軍は河南を侵掠し、山西直隸に及べり。

咸豐の名臣

此亂の間に、湖南の曾國藩、最も戡定に力を盡したれば、曾國荃、國藩の弟胡林翼、江忠源、左宗棠の如き名臣は、皆湖南より出てたり。その外最も顯れたる功臣は、安徽の李鴻章、蒙古の親王僧格林沁なり。この頃清の武備大に頽れ、八旗の兵も各省の兵も懦弱にして用をなさざる故に、曾國藩等は、郷勇と稱する民兵を募り、訓練して用ひ、國藩の兵を湘勇と云ひ、江忠源の兵を楚勇と云ひ、李鴻章の兵を淮勇と云へり。胡林翼等は湖廣を定め、曾國藩は閩浙を平げて、賊

郷勇

アロー事件

勢稍衰へたれども、撚匪と云ふ流賊、大河の南北に起つて、長髮賊に應じたる上に、英佛二國との紛議起り、清廷大に困めり。

此紛議は、アロー事件と稱し、英國の旗を立てたるアローと云ふ小船に、廣東の兵士の踏み込んで清人を執へたるより始まれり。安政三年、咸豐六年。此時佛蘭西の宣教師、廣西の官吏に殺されたるに由り、佛蘭西帝ナポレオン第三は、兵を發して、英人と力を并せ、先づ廣州を攻め陥し、咸豐七年。進んで渤海より天津に入り、清の使臣と條約を結んで還り、咸豐八年。明年英佛の公使は、君主の批准を経たる條約書を交換せんが爲に、清京に向ひたるに、大沽にて清軍に砲撃せられて去れり。

英佛聯合

北清侵伐

咸豐十年、萬延元年、西紀一八六〇年。英國公使エルチン、佛蘭西公使グ

北京條約

ローは、船艦百餘艘を率ゐて、白河に入り、僧格林沁の兵を敗り、進んで京城を侵し、圓明園の宮殿を焚毀せり。文宗は難を避けて熱河に在り、弟恭親王奕訢を留めて和を請はしめ、露西亞公使イグナチエフ、その間に立つて調停し、天津條約を修正し、清國は償金八百萬兩づゝを二國に拂ひ、牛莊、登州(芝罘)、臺灣、潮州(汕頭)、瓊州、九江、漢口の諸港を開き、基督教師の布教を自由にし、九龍半島を英國に讓れり。

洋兵會剿

咸豐十一年、文久元年。曾國荃等、安慶を平げたれども、蘇杭の地、賊勢猶盛にして、上海に逼りたれば、洋兵會剿の議起り、穆宗の同治元年、文久二年。阿米利加人華爾を雇ひ、兵勇を訓練せしめ、常勝軍と號し、英佛の援兵と力を合せて、屢賊を敗

常勝軍

れり。此時曾國藩は、諸軍を統べ、曾國荃をして江寧を圍ましめ、左宗棠に浙江の事を、李鴻章に江蘇の事を任せ、華爾

戈登將軍

死して、英人戈登を雇ひ、常勝軍を率ゐしめ、二年、蘇州を復し、三年、元治杭州を復し、遂に江寧を平げ、洪秀全自殺し、各省の餘賊も撚匪も相踵て鎮定せり。

第八章 露人の東略、清露の關係、英露の衝突。

莫斯科の兼并

金帳汗トクタミシが帖木兒に破られてより後、克里姆白帳兩部の争ひ絶えざる間に、莫斯科大公イヴン第三は、露西亞の諸侯を并せ、文明十二年、西紀一四〇年、白帳部より出てたる金帳汗を滅ぼし、始めて蒙古の羈絆を脱し、イヴン第四イヴン第四の孫は、喀散國アストラカン國白帳部の裔部を滅ぼし、露西亞の勢漸く大なり。此時青帳汗の裔にて今のトボルスクの邊を領して、悉畢兒汗と稱する者ありしが、ドン河の畔に住める喀薩克部の酋長エルマーク、衆を率ゐて、ウラル山を踰え、悉畢兒汗を撃ち破つて、其地をイヴン第四に奉れり。

悉畢兒汗

露人東略の始

天正十一年、西紀一五八三年、これ露人東略の始まりにして、此後北亞細亞の露領を總べて悉伯利亞と云ふは、悉畢兒より起れるなり。

喀薩克の侵略

ミハイル王の時に至り、益、喀薩克人を東方に派遣して、エニセー河レナ河の地方を略取して、その土人を威服し、元和永中、正保元年、西紀一六四四年、喀薩克人ポヤルコフは、ゼーヤ河を下つて、黒龍江の地方を探り、慶安四年、西紀一六五一年、ハバロフは、雅克薩の地にアルバジン城を建てたり、これより清露の争戦起り、元祿二年、清の康熙廿八年、西紀一六八九年、チルチンスク條約にて露人は、外興安嶺以南の地を清に譲れり。

恰克圖條約

享保十二年、清の雍正五年、西紀一七二七年、二國の使者境上に會して通商條約を結び、國界を定め、恰克圖を以て互市場とせり。其後清國は、内亂屢起り、東北の警備を怠りしかば、東悉伯

愛琿條約

利亞總督ムラ井ヨフは露帝ニコライ第一の命を奉じ、連に侵略を企て、安政元年、咸豐四年、西紀一八五四年舟師を率ゐて、黒龍江を下り、遂に江北の諸處を占領し、五年、清の使者に逼つて愛琿條約を結び、江北の地を悉く取れり。萬延元年、咸豐十年、英佛の同盟軍の清京に入りたる時、公使イグナチエフは、調停の勞を取つて和議をまとめたるに由り、その報として烏蘇里江東の地を露國に譲らしめ、その南端に浦鹽斯徳の港を開けり。

北京條約

和卓の遺孽

清の高宗の回部を平げたる時、和卓の子孫、浩罕に逃れたりしが、道光中、浩罕の兵を借りて、屢回疆を侵擾したれば、宣宗は、浩罕に年金を與へて、和卓の一族を禁錮せしめたり。然るに元治元年、同治三年、西紀一八六四年、東干族と稱する回教徒、烏魯木齊に亂を起し、回疆諸部多く應じたれば、和卓の

ヤクープベ

露兵の伊犁占領

兵又浩罕より來り、其將ヤクープベグ、其主を廢して、之に代り、東干族を下して、回疆を統轄せり。

此時伊犁の回教徒も、亂を起したれば、露人は、邊境の鎮撫に托し、明治四年、同治十年、西紀一八七一年、兵を進めて、伊犁に入り、其地を占領せり。十年、光緒三年、ヤクープ死し、明年、陝甘總督左宗棠、回疆を平定したれば、清廷は、露將に伊犁の返還を求め、崇厚を露國に遣して協議せしめたるに、露廷の過大なる要求に應じたるが爲に、清の朝議沸騰し、兩國敵意を抱き、境上に兵を集めたり。然るに曾紀澤、露國に至り、再び談判を開き、兩國互に譲り合ひて國界を定め、清國より金九百萬ルーブルを出して、協議成れり。明治十三年、光緒六年

伊犁條約

波斯のカヂヤル朝

波斯は、ナーデルヤーの死して後、内亂相踵ぎ、寛政六年、西紀一七九四年、今のカヂル朝の始祖アーガムハムド、其國を一統せし

第一阿富汗戦争

が、其頃露國は、高加索地方を侵略して波斯に逼りたれば、波斯屢戦ひたれども勝たず、遂に地を割て和を請へり。これより露國は、波斯を懐け、かつ中亞細亞に於ける勢力益々盛になりたれば、英人竊に之を畏れ、印度大總督オークランドは、阿富汗斯坦の篡王ドストムハメドを味方に引き入れんとしたれども、聽かれざるに由り、天保十年、西紀一八三九年、一八軍を發してカーブルに入り、前王ヤーシウネの孫を擁立せり。然るに阿富汗人、新君に服せず、亂を起して、駐屯の英軍を殺戮したれば、大總督エレンボルは、直に復讐の軍を出し、カーブルを荒して還れり。其後ドストムハメドは復王となり、英人と和して波斯の兵を敗りしが、その嗣王は、露人に誘はれて、英人に叛きたれば、明治十一年、西紀一八七八年の第二阿富汗戦争起れり。

第二阿富汗戦争

三汗國の征服

中亞細亞の三汗國、機窪、布哈爾、浩罕は、露國の畏るべきことをも顧みず、互に争鬪を事とせしが、第一阿富汗戦争起れる時、露軍は、速に機窪を撃ち取らんとしたれども、利あらずして退き、慶應元年、西紀一八六五年、浩罕の兵を敗つて、塔什干を取り、明治元年、西紀一八六八年、トルキスタン總督カウフマンは、布哈爾の兵を敗つて、撒馬爾干を取り、浩罕、布哈爾、皆屬國となり、明治六年、西紀一八七三年、機窪も屬國となれり。浩罕人は、露國の羈絆を脱せんとして、亂を起し、明治九年、西紀一八七六年に滅ぼされたり。

英露の衝突

明治十七年、西紀一八八四年、露人は、トルコマン族を敗つて、メルヴを降し、阿富汗領のヘラトに逼り、英露の衝突起りたるが、明治廿年、西紀一八八七年、英國は、一步を譲り、露領と阿富汗領との界を定めたり。